

龍 舟 競 渡 考

—— 中・日民俗行事の比較研究 ——

林 曦 中[※]

はじめに

I. 中国の龍舟競渡

1. 競渡と龍の持つ力
2. 清代から現在までの競渡の変遷

II. 日本の舟競渡—長崎を中心に—

1. 長崎のペーロン
2. 長崎のペーロン船
3. 期日と地理分布

4. 茂木地方のペーロン

5. 陸ペーロン

III. 中・日の比較研究

1. 競渡の祭日
2. 競渡船の形態
3. 競渡に伴う儀礼
4. まとめ

おわりに

は じ め に

人々が普通の生活を営んでいく上で、時間の経過をはっきりと認識できる機会が数多くある。民俗学的視点では、日常を「ケ」と表現し、普通と異なった状態を「ハレ」という表現をとっている。日常生活に、祭りや、年中行事が設けられるのは、「ハレ」の時である。こういった「ハレ」を民俗次元に合わせると、「節」であり、「折り目」にあたるとは、多くの学者が指摘している。特に、農耕社会の段階では、作物の播種の準備や成育、収穫などの生産段階ごとに、節目をつけ、いろいろな行事が行なわれるのは、不可欠のものであった。この「節」に、行なわれる祭事は、国の固有信仰と深い関係を持って居り、民族的多様性を持ち、その民族の歴史や生活文化と深く関わってくる。

産業化した今日の社会では、古い風習は、田舎でしか見られなくなり、都会では、簡略化されたり、或いはもう一つの別の新しいものに変わったりすることが多い。船の競漕を主とする端午の節に行なわれる龍舟競渡の行事も、その中の一つである。

中国では、古くから、端午の節に、龍舟競渡（即ちボートレース）が行なわれてきた。そして、中国だけでなく、中国の南部から東アジア、東南アジアの諸地域には、特に盛んに行なわれているのである¹。ここ数年、競渡の世界大会も行なわれるようになり、今年（1989年）は、その大

※筑波大学大学院地域研究科

会が、日本の長崎で行なわれ、中国、ホンコン、シンガポール、オーストラリアなど、世界各国からの七チームを含む二十九チームが櫓さばきを競った。だが、これは、元来の民俗行事として行なわれたものが、力と技を中心とする競技に変わり、スポーツ化されてしまったものである。

(一)、先行研究

民俗行事としての中国の龍舟競渡に関する研究は、今まで多く発表され、ヨーロッパ人研究者にも注目されていた。代表的なのは、デ・ホロート (de Groot) で、アモイ (廈門) の年中行事についての考察のなかで、五月の龍舟競渡は、天上の二頭の龍の戦いを模しており、この龍の闘争の結果、地上に雨がもたらされ、競渡の目的を水神の恵みを乞うことにあると指摘する (de Groot, J.J.M., 1886, *Les fêtes annuellement célébrées à Emoui (Amoy), Etudes concernant la religion des Chinois*)。スウェーデン人のアイマールは、明代の陽嗣昌によって、湖南省武陵の龍舟競渡行事が記録された『武陵競渡略』に基づいて、その著 (Aijimer, G., 1964, *The Dragon Boat Festival on the Hupeh—Hunan Plains, Central China*) の中で、中部中国、湖北、湖南平原における競渡行事と稲作との関連を追求し、そのシンボリズムの構造を論じる。結論としては、端午節に行なう当地の競渡では、乗組員の舟から水中への兵罐 (米と豆を容れてある) 投入は、祖先による田植え、競渡終了後の送標は、祖先送りを表わすという。エバーハルトは、競舟の際、たびたび負傷者や溺死者が出た記録が多いことに注目し、競渡の目的は人身供儀の意味をもつと述べ、競舟は、古代越文化に属するものと指摘する (Eberhard, W., 1952, *Chinese Festivals*. 1968, *The Local Cultures of South and East China*)。

一方、競渡の文化史的帰属について、比較的早くから論じた中国の学者には、聞一多氏がいる。氏は、「端午考」(『聞一多全集(一)』1968年)のなかで、端午の競渡は、もともと揚子江下流の呉越の文化のものだったと考え、古伝の呉越は断髪文身の国であり、文身の文はもともと龍文であって、普通船に龍を刻むのは元来呉越の風習である。船に龍の頭と尾を取り付ける龍舟は彼らの文身と同じように、蛟龍が弁別しやすくその害を避けるためであると推測した。これと関連して、凌純声氏は、「記本校二銅鼓兼論銅鼓的起源及分布」(『文史哲学報』第一期1950年)の中で、雲夢の大沢で発見された古銅鼓の上の舟船形紋の型式が、競渡の龍舟と似ているところから、龍舟文化の起源を古代雲夢の大沢に住んでいた黎獠族の文化の一つであると述べる。

また、文化史に関する一般的な議論ではなく、具体的な事例を上げて論じているのは、台湾の文崇一氏と黄石氏である。文氏は「九歌中的水神與華南的龍舟賽神」(『民族学研究所集刊』第十一期所収、1961年)という論文で、中国の龍舟競渡に関する文献資料から競渡の成立や目的などについて、幅広く考察し、中国の龍舟競渡を大観したものである。黄石氏は、『端午礼俗史』(国立北京大学中国民俗学会、民俗叢書102所収、1963年)で、競渡の資料を提示しながら、最古の資料に現われた競渡が、軽いスピードのでる舟だったらしく、龍頭龍尾を象った龍舟による龍舟競渡は、中唐以後であることを明らかにしている。

この二氏の研究を受け継いだ日本の学者の君島久子氏は、競渡に伴う龍舟祭の分析から、龍舟競渡の目的は水神を祭ることにある(「竜神(竜女)説話と竜舟祭(1)」、『国立民族学博物館研究

報告』二巻一号所収、1977年）と指摘する。守屋美都雄氏（『荆楚歳時記』、東洋文庫324平凡社、1978年）は、宗凜の『荆楚歳時記』を訳註し、競渡の起源は、地方によって結び付けられる伝説の主人公が異なっているが、いずれも屍を水中に沈めたという共通点から、雨神説或いは人身御供説と関連させて考えておられる。その他、日本人の研究者による初期の研究は、競渡は水神への犠牲の行事であったと指摘した中村哲氏の「競渡考」（『民俗台湾』第四巻五号所収、1944年）があり、南中国から東南アジアにかけて競舟儀礼の分布と関連して研究されたのは、「競漕は、水の神の祭りであると共に、雨と豊饒とを齎すべき呪術であったのではなかろうか」と指摘する山本達郎氏（「競渡考」『東洋史研究』第八巻、1943年）と馬淵東一氏である。馬淵東一氏は、東アジアの龍船競渡民俗を解説して、沖縄のハーリーについて、多くの問題点を提起した。（爬竜船について）（『馬淵東一全集』第三巻、S 39）。

その他、長崎のペーロンを中心に論じたのは黒岩義嗣氏の労作「ペーロン大系」（長崎日日新聞、昭和四年五月十日～九月三日所収）、『天草ペーロン志』（天草民報社、昭和三十年）などがある。氏は、歴史的、比較民俗学的に龍舟競渡の風習を追求し、インドから、マレー群島、大洋州方面の競渡風習の事例をあげ、中国の競渡の風習が南洋から伝播したものと、独自の見解を示し、長崎近辺各地のペーロン行事について、詳しく調査を行った。近年では、日本の舟競渡を中心に、事例をあげながら、日本の競舟の分類化を試みたのは、海野清氏の研究（「船競漕の民俗一事例を中心に」、『民俗学評論』18-19、1980年）があり、東アジア、東南アジアにおける競渡を文化史的に分析し、水稻耕作民文化層に属すべきだと指摘したのは、寒川恒夫の研究（『稲作民伝承遊戯の文化史的考察』1981年）である。更に清水純氏（「東アジア・東南アジアにおける競舟儀礼について」『季刊人類学』14-4、1983年）は、寒川氏の研究を受け、広い視野から、東アジア・東南アジアにおける競舟儀礼について、地域的類型を出している。

（二）、研究目的と方法

以上、今までに行なわれてきた諸研究の概要を見てきたように、競舟行事に関しては、少なからぬ考究が重ねられてきたが、文化史的背景に関する議論のほか、ある地域を具体的な事例を通じて、競渡の由来や目的を追究してきたものが多い。本論は、こういった先行研究をふまえたうえで、民俗行事として長崎茂木地方のペーロンの現状について、報告し、中国から伝わってきたといわれているペーロンの背景にある民間信仰を追究し、それぞれの地域文化、風習と結びついた龍舟競渡の変遷を見てみたい。競渡行事にまつわる期日や船の形態、競渡に伴う儀礼の性格などの要素の分析によって、競舟行事に対する理解、そして、中・日における行事の背景にある民間信仰、文化の異同等への理解を深めることを目的とする。

中国の龍舟競渡と同じ行事は、長崎では「ペーロン」と呼んでいるが、日本のその他の地域にも見られ、沖縄の「ハーリー」はその例である。ここでは、長崎のペーロンだけを取り上げ、龍舟行事の近隣地域の具体的な比較研究の試論とさせていただきたい。

【参考文献及び註】

1. 馬淵東一氏は（pp. 418-422）の中で、龍舟競渡の分布を①揚子江流域以南の地域、②華僑

が移住した台湾や北ボルネオ、③タイ、ラオスなど、④日本の長崎、沖縄、などと分類している。

I. 中国の龍舟競渡

1. 競渡と龍の持つ力

龍舟競渡の風習を考察する場合には、競渡風習の舟そのもの、すなわち龍舟というものの濫觴を考えてみる必要があると思う。その中でも、特に龍の持つ力に重点を置きながら、進めていきたい。龍という考え方は、世界各地に散見するが、中国の龍は、ペルシヤやインドの龍の思想を受け入れると共に、中国独自の複雑な展開をとげてきたように考えられる。ここでは、中国を中心に考えたいと思う。

『史記』(百衲本) 卷十二、孝武本紀第十二の条によると、「黄帝采首山銅，鑄鼎於荆山下，鼎既成，有龍垂胡頰，下迎皇，皇帝上騎，群臣・後宮從上龍七千人餘人，龍乃上去，餘小人不得上，乃悉持龍頰，龍頰拔墜」とあり，それによると，黄帝が首山で採った銅を荆山の下で鼎に鑄造したところ，龍が下りてきたので，黄帝以下群臣・後宮なども帝に従って龍に乗り，天に上ったという話である。これは，紀元前二世紀，漢の武帝の頃の司馬遷の記述である。出石誠彦氏は，龍の実体は容易に解き難いが，以上の書やその他の典籍に多く現れる龍の説話は，概ね聖王の祥瑞としている¹。また，天子が龍の化身であると見做され，龍は天子を乗せて天へ昇るものだと考えられてきた。天子の顔を龍顔，朝廷は龍廷，今でも，龍神，龍王廟，龍宮，龍床など，龍と結びつくものも多く，現在の中国文化のなかにも深く根を下ろしていることが窺えよう。

聞一多氏は，龍は人間が想像してきた生物界の動物で，異なるトーテムからなる想像上の動物の総合であると述べてる²。龍と雨との関係を初めて記した文献は，『呂覽』召類篇にある「以龍至雨」である，と文崇一氏が指摘している³。元来，龍は人間が想像した一種の動物であるが，その後，神格化や人格化され，不思議な力を持つものと思われるようになった。

劉昭撰『後漢書志』(百衲本) 卷第五，礼儀中の条に次の文がある。「自立春至立夏，盡立秋，郡国上雨澤，若少，府郡縣各掃除社稷，其旱也公卿官長以下行雩禮求雨。」この文によると，立秋が終わっても雨が降らない場合は，公卿官長以下が雩禮（ウレイ，雨乞いの儀式）を行い雨を求めるといふ。白鳥清氏は，劉昭がこの文に注記した「一説大雩者祭於帝而祈雨也」というのを引用して，龍はその帝と同じもので，自由に雨をなし得るものとして，天空に棲する靈物である，と指摘している⁴。農業民族にとっては，春季農作物を植えるとき，また，夏期植物の繁茂期に旱魃に合うと，農作物の枯渇を憂え，人々は生活に恐怖を感じるあまり，求雨に苦心慘擔するのである。それゆえ，請雨の儀式といえは，春季から夏季にかけて行なわれるのが通常であろう。その求雨儀式によく出てくるのは，神といわれている雨を司ると思われる龍なのである。『左伝』（春秋左氏伝）恒公五年によると，「龍見而雨」（龍が現れると雨が降る）とあり，龍への人々の期待の大きいことが分かる。この頃は田植えの時期で，水が必要であり，水をもたらすとされて

いる龍を祀って、雨を祈り、龍に託して、水と豊かな稔りを願うのである。エバーハルト氏も、「龍は雲と暴風雨の中の象徴である。」「春になると天に昇り、夏の間は雨龍としてそこで過ごす力を有し、……なによりも豊饒をもたらす雨の動物」だと、指摘している⁵。

中国の龍舟競渡の行事では、「風調雨順」（天候が順調で雨が降ってくれること）など雨乞いを目的とするのが多く見られるが、それは、龍が雨をもたらす神だと信じられているからである。龍が不思議な力を持つと信じられているため、人々にとっては、恐怖的存在でもある。鈴木氏は、現在中国の貴州省の施銅における龍船祭の由来譚について、次のように記録している⁶。

「昔、久宝という苗族の男の子がいました。彼は仲間と一緒に清水江の畔の龍潭に魚を釣りに行きました。間違っ川の中に落ちてしまったので、仲間の子供は走って戻り、久宝の父親（宝氏）にこのことを告げました。この宝氏は魚釣りの名手だったので龍潭には悪い龍がいると知っており、自分の子供が川に落ちたと聞いて、大変焦りました。そこで、いそいで一本の長刀をもって川辺へ行き龍潭に飛び込むと、不思議にも龍潭の底には洞があり、その中には水がありませんでした。父親が潜入した洞は悪い龍の住み家（龍宮）で、龍が死んだ久宝を枕にして眠っているのを発見しました。父親は刀を抜いて悪い龍を殺そうと思いましたが、自分はたった一人なので龍に敗けるといけなと思い、そのまま家に戻りました。……

父親が再度龍宮に潜入しました。龍宮の周囲には草がたくさんあるだけでなく、龍宮そのものもわらぶき（草屋）でした。彼は、そっと悪い龍の身体の下から子供の久宝を引き出したのですが、龍は依然として眠り続けて眼を覚ましません。彼は燐石を取りだし燈心草に火をつけ、龍宮に火を放ち、子供を背負って家に戻りました。その火は大火になって九日九晩燃えつづけ、悪い龍は焼け死んでしまったのです。……

そして、人々は今後このような災厄がふりかからないことを願い、お互いに喜びをともにしあって、船を出してお祭りをしました。」

これが施銅地方苗族の龍船節の始まりだという。ここでは、龍は悪役である。その他に、鈴木氏はこの文の中で、村松一弥氏の報告をのせている⁷。これも悪龍についての話で、次に引用したい。

「苗族においては銅が龍を沈める金属と見なしていて、銅鼓を領域の鎮めとして土中に埋めたり、川や泉の水を飲む時に銅銭を水中に入れて龍よけとしたり、銅のクイを龍のいる土中（龍脈）に打ち込んで龍をはらう、といった習俗」があるという。

ここでも、龍は悪物だと思われる。人々は龍の害を避け、龍のもたらした災害を免れ、龍を禍神として祭って、競渡が行なわれていたことが分かる。また、龍蛇は、恐れるべき洪水の所為と見られていた。『尚書』大伝・洪範五行に「時則有龍蛇之敝」や『孟子』勝文公下に「禹掘地而注入海，驅蛇龍而放之菴」などの記載からも、古代人が龍の災害を免れようとした面影が見られる。

龍の害を恐れながらも、古代人は龍を水を司る神として大きな期待をかけていたのである。つまり、善い面からとらえた龍である。

『説苑』辯物に「大旱則雩祭而請雨」とあるように、昔から祈雨の風習があった。漢の董仲舒『春秋繁露』に、求雨の儀式について記載がある⁸。それによれば、旱魃に遭遇すると、四季いずれの時を問わず、土龍を作成して請龍の式を行なったことが分かる。聞一多氏によれば、呉越地方では、昔から断髪文身の国であり、文身の文はもともと竜文であった⁹。体に文身することは、とりもなおさず、龍になることであり、水中にあって龍の害を受けぬ、つまり、龍の同族になるからであるという。悪龍の同族になることによって、競渡が行なわれ、龍神の保護を求めるのである。ここでは、競渡船は、龍の憑代として、神そのものだと考えられている。

このように、龍は善悪双方の両義的性格をもち、禍神の一面と水を司どる靈的存在としてのもう一面を持っているのである。以上によって、龍の二重的性格による龍を象った舟の競渡の理由を、次のようにまとめた。

龍	性 格	機 能	目 的
善	靈的存在	雨を降らす 水を司る	雨乞い 豊作祈り
悪	禍神	洪水をもたらす 災をもたらす	龍の加護を受ける 水界の靈を鎮め和める

したがって、龍はある時は、水中の邪悪な力の象徴であり、ある時は邪悪な力に対抗して征圧することのできる神聖な力の象徴であり、雨を降らしたり、農作物の豊穡をもたらしたりすることもできると考えられている。龍舟に結びつく龍の性格は、けっして単一なものではなく、伝統的な複雑な様相を示しているのである。

君島氏によれば¹⁰、「龍舟」という語は『淮南子』（B.C. 2世紀）にすでに「龍舟鷁首」なる語があり、『楚辞』（B.C. 3世紀）においては、「龍輶に駕す」という表現があるという。『穆天子伝』には、「天子乗龍船鷁舟、浮於大沼」とあり、その註には「舟以龍鳥為形、制於今吳之青雀航」がみられ、龍舟は天子の乗る舟をさしていることが分かる。『穆天子伝』は周の穆王の西征についての話を記述したものであるが、史料の価値については、諸説がある。ただ、西漢代の初期（B.C.193-141頃）の人の墓が一九七二年一月から四月にかけて、湖南省長沙市東郊外の馬王堆で発掘された。その中に、「彩絵帛画」があり、この画は、天上・人間世界・地下の世界の景物を描いてあるという。その絵の中に青龍と赤龍の二龍で形作られている舟の絵が描かれていて、複数の人間が乗っている¹¹。その意味は、今後の課題とするが、少なくとも西漢代或いはそれ以前から「龍舟」についての思想があったものと思える。この場合は、天子や貴族階級の龍についての考え方であろう。それが有名な隋煬帝の龍舟遊に発展していった可能性もあろう。

隋代は三十七年間（581-618年）の歴史しかないが、その間に、黄河から淮河までの運河を開き、陽帝が、それを利用して江都への巡幸を何回も重ねた。その舟遊記を記録した『大業雜記』に、煬帝の使用した龍舟の大きさについて次のような描写がある。「船高四十五尺、闊五十尺、長二百尺、四層……」といった大龍船であった。清の半ばごろでも、龍舟で行楽する風習が残っ

ている。李調元の『南越筆記』によると、「粵中五月採蓮競渡……今此風已戢。惟大洲龍船，高大如海舶，具魚龍百戲，積物力，至三十年一出。」と、廣東地区などの競渡と龍舟が描かれている。この文によると、粵地方では、五月に競渡を行ない、標幟を奪い勝負を決し、逾月（六月）まで続くものもあった。だが、今はその風習はすでに見られない。ただ、大州の龍船は海舶（外国に行く大型貿易船）のような大型船で、積載物も大量で、これは三十年に一度出されたと云う。ここでは、競渡を止めても龍舟は観賞用のものとして、使われていたことがわかる。だから、これらの龍舟は競渡用のものではなく、天子や貴族たちの舟遊用のものであり、行楽の道具であった。重々しい船体と遅いスピードから考えても、それは競渡にはふさわしくなかったのである。

龍舟が競渡と結びついて考えるようになったのは、唐以後のことだと、黄石氏がいう¹²。つまり、唐以前の記録には「競渡」とのみ見られ、龍頭尾の装飾を取り付けた説明がなかったのである。唐の中期になると、競渡用の船を龍の形に作る、「龍舟」が出現し、現在の「龍舟」のものと形ができ、これは、競渡史における一つの大きな転化期であると黄氏が指摘している¹³。

競渡及び競渡船の文字の起源は、その風習由来と同じように、茫漠としており、はっきりとは分らない。中国の古い文献を見てみれば、南齊の劉澄之の『鄱陽記』（『太平御覽』巻66，地部，潭所引）に、「懷蛟水，一名は孝經潭。県南二百歩に在り。江中流石の際に，潭あり。往々，蛟ありて，浮び出で，時に人を傷つく。五月五日に至るごとに，郷人この江水において船を以て競渡す。俗に，屈原のための禳災す。」と、守屋氏が述べている¹⁴。ここでは、「競渡」の字が見られ、その他には、呉の周處が書いた『周處風土記』や『荆楚歳時記』に「競渡」の字が出ている。それが、もっとも古いものとされている¹⁵。だが、その競渡という文字があるだけで、競渡に使う船の形などについての説明がない。おそらく競渡風習の胎生或いは伝播に伴って生まれた言葉であろう。

競渡風習が中国南部地域で盛んに行なわれて以来、その呼び名も各時代、地域によってバリエーションを示している。競漕龍船、競舟など龍舟競漕を表わす語もあれば、水嬉、水馬、飛鳥、鬼船、送標、送瘟などの競渡の意味から名付けたものも多い。その代表的な総括として、もっとも多く使用され、現在まで伝わっているのは龍舟競渡という言葉であろう。それは、一種の熟語として文献に頻繁に現われ、定着してきたようである。これは、中国大陸だけでなく、競渡風習の分布地の台湾、日本や琉球まで、その風習と同じように、伝承されているのである。

黄石氏は、唐以後の龍舟を、次のように定義している¹⁶。「自唐以来，競渡務為輕駛前建龍頭，後豎龍尾，船之両旁，即為龍鱗，而徐絵之，則之龍舟」。つまり、競渡用の龍舟は、隋煬帝の舟遊時の龍舟とは、違う意味を持つ。『荆楚歳時記』には、「五月五日，競渡あり，俗に屈原が汨羅に投ずる日，其の死所を傷むが為なり。故に並びに舟戦を命じて以て之を拯う。舸は其の輕利を取る。之を飛鳧と謂う。一は自ら以て水車と為し，一は自ら以て水馬と為す。州将及び土人は悉く水に臨みて之を觀る。蓋し越人，舟を以て車と為し，楫を以て馬と為すなり。」とある¹⁷。ここでは、競渡用の舟は軽くて速度が早いことが特徴である。軽くて捷く走る競渡用の舟に龍頭，龍尾を取り付けることによって，初めて龍舟競渡が成立したのである。黒岩氏や池長氏によると¹⁸，

競渡（ボートレース）の風習は、インドやマレー諸島から中国南部方面に伝播した可能性もあると言うので、南部方面で行なわれていた龍形でない競渡船に、北部の天子や貴族階級の龍船の思想が伝わり、競渡用の舟に龍頭・龍尾を取り付けるようになった可能性もあろう。南部方面では龍の形をした競渡船と共に従来の龍形でない舟の競渡も行なわれていた。後には龍形でない競渡船も競舟或いは龍船と呼ばれた可能性もある。

以上のような龍舟の機能から、龍舟は次の二つに分けられるのではないかと思う。

龍 舟	使 用 者	特 徴	使用目的
非競渡用	天子、貴族	大きく、緩慢	行 楽
競 渡 用	庶 民	小さく、軽捷	競 渡

貴族的な龍舟の戯が、民衆的な競舟の戯に伝わり、更に龍舟競渡が舟祭の風習として広く行なわれるようになったのは、龍の持つ力の要素が強い。唐以後、龍舟競渡の風習は、だんだんと南部各地に広く伝わっていったが、宋や明・清代になっても、宮廷における水嬉的競渡がたびたび盛んに行なわれていたのである。

2. 清代から現在までの競渡の変遷

民間競渡は、これまた宮廷のそれよりは賑やかなものである。清代になって、荆楚の地や呉越の地および競渡風習のあるその他の地方では、龍舟競渡がいったいどういうふうに伝わり、そして、行なわれていたのかみてみたい。龍舟競渡を中心に研究されている君島久子氏は、「中国文献にみる龍舟競渡—方志資料を中心として」¹⁹のなかで、清朝の地方志の資料の整理をされているので、主にそれを基礎として、考察してみたい。

(A). まずは、競渡の歴史のもっとも古い荆楚の地をみてみよう。

中国の学者范文瀾の研究によると、「楚国の領土は中原に至り、韓、魏、齊と境を接し、西には黔中、巫群があり、巴、秦ととなり合う。南には蒼梧があり、百粵と境を接し、東は海岸に至る」という²⁰。周代の楚は今の湖北省を中心とし、その後は、湖南、江西、安徽、浙江省などに広がっていったのである。戦国時代の屈原の国—楚は、荆とも呼ばれていたため、『荆楚歳時記』には、戦国時代の楚国の年中行事も記録していたものと思われる。

湖北、湖南両省が、『荆楚歳時記』に記された競渡の発祥地の洞庭湖を挟んであり、地理的には、荆楚の地の中心となるので、まず、湖北省の近代の記録をみてみたい。

(1) 『武昌縣志』巻三ノ十五、清光緒十一年刊本、柯逢時 1885

「端陽、蒲艾を懸け、雄黄を酒に泛べ、綵を懸けて悪を避け、近水の居民、龍舟を競う。舟、黄、紅、青の三色をいろどり曹を分ちて以て勝負を争い、或いは酒食を以ておくり、勝者これを得るを奪標という。(案ずるに劉錫競渡曲注に、競渡は武陵に始まる。今戯を挙げて、其の音に和す。みな呼びて「何在斯」と言う。)十七日に及び紙の舟をつくりて神を祈る。」

端午の節句の行事が行なわれる。「奪標」の風習がある。紙の舟を造って神を祈るとあるが端午の避邪、禳災の性格から、おそらくこの地の神は悪の神であろう。

- (2) 『宜都縣志』卷三下ノ二十五 清同治五年刊本 龔紹仁 1881

五月五日 蒲艾を門に懸け、張道陵、虎を馭すを書いた符を室中に貼り、雄黄酒を飲み角黍を食べてまた以て雄黄酒と酒をまぜ、徧く牆壁隙地に洒、子兒の耳に塗りて虫蛇の毒を避くと云う。是の日競渡、十五日を大端陽と曰い競渡尤も盛んなり。」この県だけでなく、湖北省では、十五日、大端陽の日に行なわれるところが特徴である。

- (3) 『孝感縣志』卷五ノ十六、十七 清光緒八年刊本 沈用増

「五日、縣河毎年龍舟を造る。打龍船と謂う、城六門各一舟を造る。門の方位を色となす。水手三十二人、鑼鼓を打ちならす人がそれぞれ一人。舟の進退はみな鑼鼓の音に従う、水手は舟を操る人から招聘する。」

- (4) 「雲夢縣」『古今圖書集成 歲功典』卷五十一「湖廣志書」

「五月五日、賽龍舟因邑河水淺、作旱龍縛竹為之。剪五色綾緞為鱗甲、設層樓飛閣於其脊、綾以剪綵文錦、中塑忠臣屈原、孝女曹娥、及瘍司水神像……傍列水手十余裝束整麗。澤日出行、金鼓簫板、旗幟濟濟、導龍而曰「送船」。……用鉄桿撐之空中、前後輪轉、宛如半仙之戲、彼此角勝。次引用牲牢、酒醴、角黍、時果祭之、極其敬畏。……合 炬焚之曰「送船」。」

この両県では、端午の行事が実に華やかである。縣河では、毎年龍船を造り、水手は三十二人もいる。荆楚が端午の行事の発祥地といわれ、雲夢は、また、古代楚の都「郢」に近いところであるため、その歴史が古いものと思われる。だが、ここでは、端午の日に、邑という河の水が浅いため、竹で「旱龍」を造り、五色の綾緞をもって鱗甲とし、そのうえ「層樓飛閣」を設け、屈原や曹娥を水神と一緒に祭る。長崎でも陸（おか）パーロンといって、陸上におけるパーロンが行なわれていたが²¹、これは、興味深いものである。そして、水中の龍舟を真似して金鼓を鳴らしながら、勝利を争う。その後、火で焼いて「送船」という。ここでは、行事の理由は水神祭りといい、「送船」の意味も恐らく避疫にあらう。

- (5) 湖南省の「岳州府」『古今圖書集成 歲功典』卷五十一「湖廣志書」

「端午、競渡、禳災と為す。疾病ある者は水際に設盤し神を祀る。草船を浮かべ送病と謂う。」

- (6) 『黔陽縣志』卷十七戸書四、二 清同治十三年序刊本 易燮堯 1874

「安江付近各村の龍舟競渡が尤も盛んである。龍舟長数丈、三十六の艚があり、七十余人坐す。十日十三より競渡を始め十五日止む。闘って命を損ねる者や水に墜ちて、死ぬものもあり、十五日を正節とす。」

湖南省の競渡も、五月十五日を大端午とし、龍舟祭がもっとも盛んである。また、舟を造り、競渡を行ない。神を祀って、「奪標」をするのは、端午の性格に一致する禳災、禳疫にあるのである。黔陽では、七十余人も乗れる、長さ数丈の大舟を記録している。または、闘って命を損ね

ることもかまわずに競渡している。

湖北、湖南両省は、荆楚の中心地で、清になっても競渡の盛大さがかわらない。五月五日に競渡が行なわれるのもあるが、十五日にやるのが多い。粽を川に投げ、端午に行なわれる禳災の行事と同様に、競渡の目的は禳災、禳疫にあるのが特色といえる。「送船」や「送瘟」が行なわれるのは、競渡を行ない、神を祀ってから、送り出すので、「神送り」の性格がみられる。

続いて、荆楚の中心と少し離れた安徽、江西省（かつて荆楚の領土）の記録をみてみたい。安徽省は、湖北省の東と接し、揚子江で両県がつながっており、湖の多い所である。

(7) 「巢縣」『古今圖書集成 歲功典』卷五十一「江南志書」

「五月五日端陽節、龍舟の戲なり、巢、もと楚の地なり、……毎年孟夏月望之日、水神を祀りて、龍舟各坊一艘を造る。各々色を異にし、舟、大小等しからず、色白を忌む。相伝う白を用いて没すと。五月朔に至り、曾中造った神を舟に迎え、舟ごとに少壯數十人集まり……擊鼓奮楫踰躍して先を争い……舟首多く盆景を載せ、簫管樂妓を挟え親族朋友を集め宴飲し、流れに従い上下して嬉遊し、五日にして止む。」

巢というところも、もとは「楚の地なり」。ここの競渡も、同じ屈原の話と結びつき、龍を船頭に飾り、競渡を行なう。『荆楚歲時記』の記録に近く、古い伝説がそのまま残されている。または、舟で「神人」を迎え、競渡を始め、友達や家族が集まり、遊龍を楽しむ風景もみられる。

江西省は、湖北省の南東、湖南省の東に接しており、近い風習がみられる。

(8) 「金谿縣」『古今圖書集成 歲功典』卷五十一「江南志書」

「汨羅より競渡の風習を習う。舟長さ六尺、広さ四尺余、博三尺……五月朔日から、鬼船を迎える。縣に舟の如くの山があり、谿民の安樂のため、是を設け、祓う事とする。今のは、その風俗によるもの。鬼船に七人、皆朱衣をつけ、三頭六臂……天中之節が尤も盛んで、観る者は、數十万人……七日に至り、降伏悪魔の奇を伝え、舟の纜を斬り、廟に舟を隠し、以て歲功を成す。」

(9) 『中華全國風俗志』下篇卷五 江西

「龍舟競渡は、屈原を記念するための風習と伝えられ、年々行なわれてきた。午後より、長幼男女新衣を身につけ龍船を觀に行く。競渡に参加する人は、午後からまず龍王廟に集まり、焚香燃燭して、龍王を祀る。その後、龍王首に紅巾をかけ、小舟を迎え、龍首を船鎗に、龍尾を船末に置く。水夫數十人船を漕ぐ。船末掌舵者一人、船首紅旗を持つ者一人。試合が始まる時、鑼鼓が鳴り始め、船首にいる執旗者が旗を振り続けながら、怪聲を出して応援する。兩岸の觀衆も大声で叫ぶ。終わったら優勝者が上がって酒を飲む。飲んだ後、再びこのような試合二回ほど繰り返す、太陽が沈むまで続く。」

ここ江西省では、競渡が楚の俗のだと明記しているところが多い。「奪標」の風習が見られるほか、龍舟の儀礼や龍王廟に祈った龍首龍尾を舟に迎えることも詳しく記録している。水夫數十人に、船末に舵取りが一人、船首に鈴のつく旗を舞うものが一人と、このような試合が三回ほど振り返られる事が、現在の競渡行事に近い形であったと思える。

以上、湖北、湖南を中心に、そして、安徽、江西省の競渡を地方志の記録から見てきたが、競渡の起源は、ほとんどが屈原説話に結びついている。その中、安徽省巢縣の競渡は、『荆楚歲時記』に記録されたものの復元のように、古い伝説がそのまま残されている。競渡の期日は、五月五日かその周辺の十五日などが最も盛んなところが多い。そして、龍舟は四月の後半（或いは五月一日）から下水し、十五日あたり（一部は五月五日）に競渡を行なうのが多く見られる。競渡に伴う端午節に行なわれる行事としては、たとえば、蒲艾を懸け、雄黄を酒に浮かべ、綵を懸けて悪をさけ、粽を江に投ずるなどが各地に見られた。舟は長さ数丈などの数字が出ており、水夫はほとんど数十人、湖南省黔陽縣では、龍船は、三十六の艚あり、七十余人が乗るなど、具体的な人数の記録もある。アヒルとりの競争や錦標を奪うなどが主で、勝ったものがその勝利者となる。または、民衆の祭りとしての龍舟祭、つまり龍神や水神を祭って龍舟を漕ぐ記録が多い。競渡の目的であるが、屈原を水神と一緒に祭るとか、水神祭りをするとところがみられ、神を迎えて競渡を行い、終わったら「送船」、「送瘟」といって、神を送り出すという禳災、禳疫の性格がみられた。

(B). では、呉越の地の遺俗を見てみよう。

春秋、戦国時代の呉は、揚子江河口の江蘇省を中心とし、越は浙江省を占めていた。この呉越の地では、古くから屈原とは違って、伍子胥説や曹娥、越王説が競渡の起源説に結ばれている²²。

(10) 范寅の『越諺』には、

「攄龍船始於吳王夫差与西施為水戲，繼弔屈原……」（つづいて『元典章』を引用して、江淮、広東、江西などのところにも水戯が行なわれ、禁止されたこともあるが、端午の日に行なうのが多いと指摘して）「安浦東昌各市，四月初六，青靛湖，六月初七，章家街橋十四五六等日，吳融，小庫皇浦莊等村，年共三十余會，不勝書。船頭則昂龍首項，尾檣在舵上，金鱗，綵旗，鑼鼓，扮故事。」

と、越の各地では、端午の日に拘ることもなく、四月六日や、六月七日そして、年に三十余會も行なわれていると述べている。舟にも龍頭を取付け、「金鱗，綵旗，鑼鼓」などが舟に附属している。

具体的には、まず、江蘇省の記録を見てみよう。

(11) 『至順鎮江志』卷三・九 民国十二年丹徒廣生重刻本 儉希垆 1923

「歲歷紀麗に曰う，勾踐に因るを風と成し，屈原を拯うを俗と為すと。南唐，毎年五月民競渡を許し，其の姓名を登録し，盡く蒐めて以て兵と為し，凌波軍と号す。」

(12) 『賽山縣統志』卷五ノ十三 民国十年，二十年鉛印本 兆允高 1923

「五月五日，龍舟競渡に戲がともない，軍器を舞い，或いは賽挙す。終了後又酒を以てねぎらう風が盛んである。」

この両縣では、かつての越王水軍を訓練することにより始まった競渡の由來說が見られる。賽山縣では、競渡に軍器を舞う戲などが伴っている。

(13) 『光緒武進陽湖縣志』卷一興地風俗四十九～五十 清光緒二十二年刊本 李兆洛 1846

「五月……五日端陽と曰う。……龍舟を競渡と曰う。舟、広さ一尋、長さ三尋、首尾に龍を象って刻し、綵を結びて楼となし旗幟を三重につらねて舟の高さ五尋。その下に水に習れし者、十六人楫を操る。にわかに金鼓かまひいすし。夜は燈数百光燭を懸く。水上に遊ぶ者を看龍船と曰い、船に伎女を載せる者を花船と曰い、白雲溪に集まる。白雲溪兩岸の樓閣を燈具を懸け、讌（宴）を設け歌鼓簫管に親しみ、一日中過ごして月落ちて乃ち止む。」

- (14) 『重修常昭合志』卷六風俗十六・十七 清光緒三十年刊本 序鴻文 1904

「三月二十九日、四月二日龍舟競渡。忠孝王、孚應王を祭る。五月五日龍舟競渡豊年を祈る。」

と、江蘇省では、越国の伝統がみられるほか、荆楚の地と同じく、端午の行事が競渡に伴う。浙江省は、どうであろう。

- (15) 『勅修浙江通志』卷九十九、風俗上十九「西五里語」 清乾隆元年重修本 沈翼械 1736

「清明節に溪川で、競渡を行なう、水戯という。」

- (16) 『義烏縣志』卷七風俗六五 清慶七年刊本 程儉 1782

「三月、沿溪の民競渡、俗に利龍船と呼ぶ。」

- (17) 『紹興府志』卷五十八風俗四十四「喜泰志」 清乾隆五十七年刊本 平恕 1782

「二月二日、競渡奪標の争が患となるので、勝負をとわず、銀皿綵帛を与えることにした。」

と、浙江省では、端午の日でない三月、二月、四月に競渡が行なわれて。そして、怪我がでるため、勝負を問わず、賞品を与えるとあり、争いを避ける方式もみられた。ここでは、競渡の目的は、「水戯」などとなっている。

江蘇省と浙江省を中心に呉越の地の競渡風習を見てきたが、この地方では、端午の行事が荆楚地方と同様に行なわれる。越王の水軍訓練の「凌波軍」や、軍器を伴う競渡⁽¹²⁾の話が残されているほか、弔屈の話は荆楚の地より少なく、「水嬉」が多く見られる。『荆楚歳時記』にあるように呉王夫差が美人西施との水戯より競渡が始まったとする説話が、まだ当地に残されていると思うのもいいが、古い話がだんだん忘れられ、人々の関心は「渡」から「戯」に変わっていった傾向だとも言える。

以上は、単なる私が引いた文献のなかから出た数字で、茫寅の『越諺』に記録されたように、呉越の地は「水郷」であるためか、荆楚の地よりは期的には、バラエティに富んでいる。

競渡の目的は、主に以下のように、分けられる。

浙江省の事例のように①「豊年祈り」、各省に見られた②「水嬉」、③「避瘟」、④「奪標」（アヒルなどの水鳥を水に投じ、それをとりあって競渡の戯の一つとなっている例がそれである。これは、荆楚の地ほど多く見られないが、やはりただの水戯ではなく、その奥に水神を祭る意が含まれていることは、黄石氏の指摘²³の通りだと思う）、⑤「水軍の訓練」（少ない場所ではしか受け継がれていない）。

舟の大きさについての記録は、荆楚の地ほどは多くはないが、江蘇省⁽¹³⁾では、「舟、広さ一尋

(八尺)、長さ三尋(二・四尺)、首尾に龍を象って刻し、綵を結びて楼となし旗幟を三重につらねて舟の高さ五尋(四尺)。その下に水に習れし者、十六人楫を操る。」からも分かるように、荆楚の地の「龍舟、長さ数丈」よりは、規模が小さい。舟を操る人も七十余人でなく、ただの十六人となっている。

(B). 荆楚、呉越の地以外の地方の記録は、どうなっているのであろう。

まず、浙江省のすぐ隣に位置する福建省をみてみたい。

(18) 『福建通志』巻五十五風俗十五 清同治十年重刊本 陳壽祺 1871

「俗に、四日、菖蒲を浮かべ五日、閩王の忌と為す。「古田志」によると、五雜俎の書に閩中は五月四日を以て節となすとある。王、五日に死せるを以てこれを避くる故なり。思うに五代史年譜には十二月に死競るを以て五月に非ざる也。」

福建では、閩王の亡くなった日を避けるため、閩中は、五月四日を競渡日とし、五日を閩王の忌となるので、競渡を避けている。

(19) 『同安縣志』巻二十二禮俗四 民国十八年鉛印本 吳錫瓚 1929

「競渡は川湖の無い地方は池(小湖)、廈門だけは海で行なう。」

(20) 「上杭縣」『古今圖書集成 歲功典』巻五十一「福建志書」

「五月五日、小艇(小舟)に蘆葦を縛して龍形を為し、水次に群戯する。これを競渡という。」

では、福建省の傍の広東省はどうであろう。

(21) 「天山草堂集」『中華全国風俗志』上篇卷八廣東

「明、奥人海に熟達し競渡して勝を争う。大舟常製より猶異なり。十余年に一度举行す。舟の広さは三丈、長さ五丈、龍首より尾に至り金光目を奪い、暈綵層樓の如し。上に仙仏、鬼神及び古代英雄に扮装させた童男女を飾る。およそ数十事。その、旋轉舞蹈は数里の外より望むもなお可なり。舟の両旁短楫を持し、鼓に應ずる者百夫。銀帽紅珍鏡を盛んに吹く。更に、遊龍十数、前後に回り、群龍の母に従い出入りせる如し。」

(22) 『順德縣志』巻三輿地略 清咸豐三年刊本 馮奉初

「龍江では毎年、五、六月に競舟を闘わす。全勝したものは埠に帰り、親戚友人を集めて飲む。其の埠必ずその年豊にして貿易も豊かであるという。」

広西省は、現在広西自治区といい、漢民族のほか、壯族、苗族、瑶族など多くの少数民族が住んでいる。その競渡を二、三紹介したい。

(23) 「王濟日詢手鏡」『中華全国風俗志』上篇九廣西

「端陽の前、初一の日に競渡の戯を為し、初五の日に至りて終る。舟は十五隻余り甚だ狭し、七、八丈の長さ、頭尾皆龍形を刻す。各舟、五、六十人有り。皆紅衣に緑短衫を着、鉦鼓を鳴らすもの数人、旗ふり一人、余は各々槳を以て舟を漕ぐ。(舟)は行くこと飛ぶ如し。二舟互いに勝負を争い、迅速なる者を勝ちと為す。」

雲南省では、

(24) 「大理府志」『中華全国風俗志』上篇第十

「七月二十三日、慈善夫人の死を弔して龍舟競渡を行なう。」

最後に、四川省をみてみたい。四川省は、揚子江で湖北、湖南とつながり、その両省から伝わった可能性が大きく、風俗も比較的類似している。

- (25) 『叙州府は大江（揚子江）に面し、端午の節に龍船會がある。船長さ三丈、細長く、船首尾に龍を彫刻す。十余人坐して漕ぐ。頭に一人紅旗を振り、中一人鼓を打ち、尾に一人小鑼をたたく。其れ行く事飛ぶが如し。』

以上、荆楚、呉越以外の地域、福建、広東、広西、雲南、四川省の順でみてきたが、特徴ごとにまとめると、次のようになる。

福建省の記録では、『閩郡疏』に記録された「閩俗端午及び九月九日競渡」の九月の期日のほか、閩中が閩王の忌日を避けるため、四日を以て正節としている。これは、沖縄糸満のハーリーが五月四日に行なわれ、五日は死者が龍舟を漕ぐ日として海にでないとしているのと、関わりがあるのではないかと、君島氏も指摘している²⁴。

広東省の競渡の記録は大変多く、粵人が海に熟達しているため、地域ごとに十年に一度、広さ三丈長さ五丈の大龍舟に小さな遊龍数十が前後を廻るといふ盛況さがみられる。だが、大龍舟に鬼神や古代英雄を扮装した子供を載せたり、上で踊りを披露したりして、数里外からもみられ、⁽²¹⁾に人が龍船の上で歌舞するなどから、これは、既に競渡用の船ではなく、娯楽用の龍船になっているといえよう。

福建と広東では、廈門の一ヶ所だけが海で行なうとある以外、「江内の諸河」とか、『馬巷廳志』卷十一風俗七にも、「川湖の無い地方は池（小湖）」と『和平縣志』卷六風俗志には、「河に近き龍舟競渡」と強調されている。これは、競渡が河を横にわたることに意味があるほか、端午の風習や、競渡に伴う他の行事をみてみても、その起源は、江南の湖や川の多い所にあることを逆に意味しているのではなからうか。

雲南省では、「慈善夫人の死を弔して龍舟競渡を行なう。」とするが、やはり水死者への供養説が見られ、屈原や曹娥などの話と、この地方の話とが結びついた、同類のものであろう。

競渡の行なわれる期日は、五月五日のほか、福建省の五月四日⁽¹⁸⁾、広東省の六月⁽²²⁾、雲南省の七月二十三日⁽²⁴⁾などが、端午の日と離れた期日の例である。

競渡の目的は、①死者を祀る—⁽¹⁸⁾⁽²⁴⁾、②水戯—⁽²³⁾、③豊年祈り—⁽²²⁾などある。

以上、清の地方志より、荆楚の地（湖北、湖南、安徽、江西省）、呉越の地（江蘇、浙江省）、その他の地（福建、広東、広西、雲南、四川省）の競渡に関する記録を引用し、内容を分析、分類を加えてみた。中国の他の地方でも競渡が行われていたが、本節では、南部各地を中心にみてみたため、割愛した。

現在の中国における競渡の行事は、文化大革命（1966—1977年）の間にも、歴代の競渡が浪費の為に禁じられたのとは別の意味で、また禁じられ、ほとんど人々に忘れられていた。ここ十年来、民俗、民族文化が再度重要視され、かつて端午の節を中心に盛んだった龍舟競渡が、再び年

中行事の一つとして、各地で行なわれるようになってきた。もっとも盛んであった南方だけでなく、都の北京でも、去年の1988年に龍潭湖での競渡が再開した。だが、現在の競渡は、ほとんどスポーツ化され、一つのお祭り行事となったのが多い。これは、中国だけでなく、日本や台湾などにも見られることである。それに、龍舟行事の記録も文化大革命期間中の地方志から姿を消した。現在、その仕事之急がられているが、まだまだ、各地で行なわれている競渡の全貌を掴むことが難しい。そこで、私は、手に入れた資料の範囲内で、現在中国における競渡について述べてみたい。

まず、発祥地といわれる荆楚の汨羅江における競渡であるが、丘恒興氏によると²⁵、(26)「この端午の節句に、今なお汨羅では、各家の戸口には艾と菖蒲が下げられ、子供達が、三角形に青笹の葉で包んだ餅米の粽を食べる風景がみられる。龍船は五月一日に江に下ろされ、水夫は競渡の練習を始める。龍船が他の村を通った時は、必ず爆竹を鳴らしながらの村民に温かく迎えられ、赤い布が船頭に懸けられる。これは、当時屈原を一生懸命捜していた魚夫達への感謝から始まったと言われているが、今は、各村の団結を意味するものとなった。

五月五日の昼から龍頭祭が始まる、水夫達は、龍頭や供養具を以て、鑼鼓を叩きながら、屈原祠につく。龍頭を置いて屈原の像に向かって礼拝した後、赤い絹布が龍頭に付けられる。そして「頭槌」(一番の漕手)がその龍頭を以て江に走り、龍頭を抱いて風呂に入るように、水中に飛び込む。他の水夫も其の後を追う。そして、龍頭をつけ懸ける。これは、龍頭が水、また水夫もその水を浴びることによって、競渡の安全が守られ、水夫達も屈原のおかげで裨災ができると信じられているからである。「赤龍」、「青龍」、「金龍」などの船があり、「青龍」船の長さは60.5尺、幅4.5尺、頭に龍頭が懸けられ、尾にはすでに造った五彩鳳尾が付けられる、船身、櫂、舵にはみな龍鱗が描かれていて、遠くからみると、伝説のなかの龍にそっくりである。「青龍」には、太鼓、銅鑼、船尾に舵取り各一名のほか、采振り一人と三十八名の漕手で、全部で四十二人が乗船している。笛音により、龍船が一気にスタート。銅鑼の音と兩岸の人々の歓声が交じる。

「寧願荒廢一年田、不願輸掉一年船」(一年間、田を荒廢するのを願っても、一年の船(競渡船)を負けないと願う。)という言い方があるように、競渡で勝つ事は、その村の名声が高められるだけでなく、村全体に豊作と幸福が訪れると人々が信じているからであろう。」と報告されている。

その他、柴田恵司、高山久明両氏の『長崎ペーロンとその周辺』²⁶に佐田雅志主演の映画『長江』の撮影班が、一九八一年五月に取材した汨羅龍船のビデオをみて分析を加えたものがある。

「……それぞれの彩船には美しく装った男女が、多分、屈原も含まれると思うが、昔の伝統、歴史上の人物に扮し、或いは舞い、或いは音楽を奏しながら通り、兩岸からの喝采を浴びる。……采振りは、船首尾端間に二台の二又の木を介して張られたロープを漕手に合わせて前方に引き、船尾を上方に曲げるように努めている。……」

汨羅江における現代競渡は、スポーツ化の色が濃くなってきたが、端午の行事と彩船の上に

屈原も含まれると思われる歴史人物に扮した男女が立ち、舞い上がったり、音楽を奏しながら、兩岸の喝采を浴びること、細長い舟に漕手のほか、中央に太鼓、銅鑼、船尾に舵取り各一名の風習は、宋や清代の洞庭湖あたりの龍舟競渡と、まったく同じである。そして、これが今の長崎ペーロンとも一致することが多いのは、柴田、高田両氏の指摘通りと思う。丘氏が記録した「龍頭祭」は前の記録のなかでも出ていたが、これは筆者が調査した長崎の茂木地方の競渡前の「海上安全、豊作」の祈願と似たようなところも多い。これについては、長崎ペーロンのところで述べることにしたい。

荆楚の地以外の地方の記録もある。

(27) 「端午節」『中国年節』²⁷

「四川瀘州地区の龍船に、漕手以外に指揮者と擂鼓隊が乗っている。指揮者は旗を持ち、船頭に立ち拍子をとる。漳州、廈門あたりでは、競渡のゴールインのところに、大きな木船を標船とし、龍船がついたら、選手達が水に入り「標」として、水中に投げてある鴨を争ってとる。広西省では、男子組と女子組に分けられ、手と足で漕ぐ両方式がある。龍船試合は一定の規則によって行なわれ、初選、復選、決選の三段階がある。」

漢民族以外の少数民族地区は、競渡の起源地ではないかと、見る学者がいるが、苗族の近年の競渡行事についての記録をみてみよう。

(28) 「清水江畔的龍船節」『雲南少数民族奇風異俗録』²⁸

「清乾龍の徐家干の『苗疆聞見録』によると「龍舟競渡を好み、毎年の五月二十日を端午節」とし、清水江の深い処で競渡が行なわれる。「其舟、大きな木で造られ、幅五、六丈、前に龍頭を懸け、後に鳳尾をつく。中に十二、三人入れる。行くこと飛ぶが如し。」とある。

現在は、陰暦の五月二十四日、台江、黄平、施秉、鎮遠、三穗、劍河など各地から清水江に集まり、四日間の龍舟節を楽しむ。

龍船を水に下ろす前に、川辺で儀式を行なう。その木の枝に白い布を懸け、一羽の白いオンドリを殺して、その鶏血で白い布を赤く染める。酒、肉、線香、紙銭も捧げる。巫師が祭りを執行して祖先の霊を招き、祖先祭祀（祭祖）を行なう。龍船の頭には赤絹布をかけ、龍順（龍が穏やかになること）を表わす。龍頭、首には金、銀、赤、緑、白の五色で塗られ、まるできらきら光る龍鱗のようだ。龍の目は爛々と光り、首は天に向かい、まるで神のように見える。銀飾りの龍角には、「風調雨順」（天候が順調であること）、「国泰民安」（その年の作物が順調で国家が泰平であること）、「民族団結、増加生産」などのスローガンを掲げる。競渡の四日間では、漕手のため、婦人たちが糯米のご飯や、酒、肉、魚などのご馳走を準備する。

龍舟長さ七丈幅三尺、丸木舟で一本造りで、一隻の大きな母船に二隻の子船がつく「子母船」の形式をとる。母船の長さは二四～二五メートル（約七丈）で、幅は約一メートル（三尺）、子船は五丈である。舟には「鼓頭」「打鑼手」と「水夫」が乗船する。「鼓頭」は、龍船祭の主催役で、船の龍頭に寄り掛かって「水夫」と対する。一定の拍子をもって鼓を叩く。いつも全村から威信と信望のある人が選ばれて担当する。祭りが終わったら、豚を殺して酒をふ

るまう宴席上で、来年度の新しい「鼓頭」を選出する。鼓と龍頭は、新しい鼓頭の処へ送られる（日本でいえば頭屋形式の持ち回りである）。

「打鑼手」は、「鼓頭」から四～五尺離れた所にかけてある銅鼓を打ち鳴らす。十歳程の男の子が女装して、「鼓頭」と対して坐って打つ。船を漕ぐ時は、鼓の「咯咯」(dong, dong)という音に合わせて銅鼓を叩き、「^{トントントウ}咯咯多，^{トントントウ}咯咯多」と鳴らす。老人（鼓頭）と少年（打鑼手）が、鼓と銅鼓を鳴らすのは、由来譚にある息子を悪龍によって殺された父親が、仇を打つ意味が含まれている。この少年の選出は「鼓頭」がどの一族から出るかを決定し、その一族の中から選ばれる。

「水夫」は全てを合わせて三十八名、村内の元気のよい青年たちである。義務参加とされていて、何ら報酬もうけないが、「鼓頭」の家乃至は全村人の集会の宴席で饗応にあずかる。船の両側に合わせて三二人がのり、龍頭に一人、船尾に五人がいて、後の一人が行先を指示し、号令一下で漕ぐ。各水夫は、それぞれ長さ五尺の櫂を持ち、青紫色に染めた木綿で、対襟の短袴を着て、頭には「馬尾鬪笠」をかぶる。曾ては龍船の時は、蓑衣をつけ、笠を冠って、雨が降ることを祈念した。

二十四日の日に、競渡が正式に行なわれる。鑼鼓の音、人々の応援の叫び声……其の日に、競馬、闘牛、闘鳥なども行なわれる。

以上は、主に荆楚の地で屈原が身を投じたといわれる汨羅江、そして中、外の学者に重ねて調査されてきた貴州省台江にある清水江（洞庭湖とつなぐ浮江に注ぐ江）における現在の競渡行事についての記録である。歴代これらの地方で行なわれていた競渡の記録とはそんなに変わらないことに気が付く。汨羅江の端午の節句の粽を食べ、菖蒲を門に懸けるなどの行事は、そのままだし、「龍頭水」を浴びて、禳災や豊作を祈願する目的や、競渡の方式なども受け継がれているのである。

以上、古い文献や地方志などを中心に、龍舟競渡の記録を見てきた。資料など不完全な処もあるが、龍舟競渡が、時代によって変遷され、中国南部を中心に広く行なわれてきた実態は、大体掴めた。

歴史の流れの中で、龍舟競渡の風習を見てきたが、大抵二種類に分けられる。それは皇帝や貴族たちが中心の水嬉を目的とする龍舟競渡と、民間における龍舟競渡である。前者は、比較的浅い人工的な池で行なわれるのが多く、あの有名な隋煬帝の大龍舟遊記から、歴代の宮廷の水戯まで、貴族たちが楽しんだのは詩歌を賦し舞楽演ずる舟遊で舟行列であり、けっして櫂打に掻き紊された池の濁りではなかった。前者は都や貴族を中心とし、後者は、特に中国南部、民間のほうで盛んであった。両者は行なわれる目的も違い、趣も異にしているのである。

では、南方における龍舟競渡を地理的な特徴ごとにまとめると、次のようになる。

地 域	期 日	舟 の 構 造	方 式	目 的
荆 楚	湖北省	五月五日(3)(4)	水夫三十二人(3)	奪標 禳災(1), 屈原, 水神を祭る(4)
	湖南省	五月五日～十五日(2)	送船, 旱龍 (4)	
の 地		五月十日～十五日(6)	舟長さ数丈, 七十余人坐す(6)	送瘟(5)
	安徽省	五月五日(5)		
	江西省	五月一日～五日(7)	舟長さ六尺, 広さ四尺(8)	水嬉(7)
		五月一日～七日	水夫数十人(9)	競漕(8)(9) 豊作祈り(8), 龍王を祭る(9)
呉 越	江蘇省	五月(11), 五月五日(12)	舟長さ一尋長さ三尋十六人(13)	競漕(12)(13) 凌波軍訓練(11)(12)
		三月二十九日(13)		豊年祈り(14)
の 地		四月二日(14)		
	浙江省	四月五日(5)	競漕(16)	水嬉(15)
		三月(1), 二月二日(17)	奪標(17)	
	福建省	五月四日(18)	子舟(20)	閩王を祭る(18), 水嬉(20)
そ の 他		五月五日(20)		
	広東省	五月, 六月(22)	舟長さ三丈, 長さ五丈, 百夫(21)	遊龍(21) 豊年祈り(22)
	広西省	五月一日～五日(23)	長さ七・八丈, 五・六十人	慈善夫人(24)
		七月二十三日(24)		
	四川省	五月五日(25)	舟長さ三丈, 十余人(25)	

A. 期日一

①競渡の期日が五月五日を中心とし, 五月朔日(一日)から大端陽(十五日)までの間に盛んに行なわれたところが多い。

②呉越の地は, 水郷といわれるほどの処であるため, 一月, 三月, 四月, 五月五日など, ほとんど一年中行なわれているようにも考えられる。

③その他の地は, 必ずしも端午の日ではなく, そして, たとえ端午の日であっても, 苗族などは, 五月二十日を端午とし, その日に競渡が行なわれることは, その民衆の生活の季節的リズムにあった日を選んでいたのである。

B. 龍船構造一

①荆楚の地は, 水夫の人数は三十何名のが普通で, 現在の汨羅江の競渡でも, 四十一名, その内, 船頭に旗振り, 中央に太鼓, 銅鑼, 船尾に舵取りとそれぞれ一名が乗っている。

②呉越の地は, 十六人などの数字がでており, 船に乗る人数は比較的少ない。集中的に分布している河や浚川で行なわれているため, 大型の船が許されなかったのであろう。

③その他は, 地方の特徴により, 「海舶」のようなものもあれば, 小舟もあった。

C. 競渡の意味は, 弔屈原, 禳災, 水神を祭るためなどと, いろいろあるが, これらから, 民間における競渡の行なわれる理由, その意義について考えてみたい。

桑山竜平氏は, 競渡が水の神を祭るため, 豊作を祈るため, 雨乞いのための祭りだと考えられ

ている²⁹。文崇一氏は、「九歌中的水神與華南的龍舟賽神」のなかで、龍舟競渡の目的としては、更に「疫病の駆除」と「平安無事」を祈る呪術的な巫術の目的を持つと指摘している³⁰。たしかに、この四つの要素が、実際の競渡の記録のなかにも多く見られた。黄石氏は、文崇一氏が広く中国南方にわたって論じたのに対し、端午の本質から龍舟祭の目的は逐疫禳災にあるという³¹。

スエーデン人のアイマル氏は、漢民族のシンボリズムや社会構成様態と結びつけ、競渡行事と稲作との関連を追及し、揚子江中流地方では、四月から六月にかけての間は、ちょうど野良仕事の忙しい時期で、そんな時に競渡を行なうのは、やはり稲作に不可欠な降雨の確保だと述べ、儀礼全体が災疫の祓除と豊作の確保の両面を持つと指摘している³²。

エバーハルト氏は、『古代中国の地方文化—華南・華中—』の著作のなかで、龍舟競渡に使用されている長い丸木舟（地方志のなか、広西省や雲南省の記録のなかにも見る）が、河の龍そのものを象徴するもので、祭は雨乞いのためであり、雨をもたらしと思われる龍に対して願うことであると述べ、または、競渡行事に關って、いつも出てくる多くの死者から、「競渡が二集団による闘いであって、負けた集団が供儀されること」になると、人身供犠説を展開している³³。

聞一多氏は、その「端午考」³⁴の中で、端午節そのものは呉越（江蘇、浙江省あたり）地方における龍のトーテム「請龍」の祭に起源するとし、船に龍の顔と尾を取り付ける龍舟は呉越の断髮文身と同じように、龍と一つになることで、蛟龍の害を避けるためであるという。

以上、龍舟競渡の行なわれる目的、言い換えれば、競舟によって期待される効果については、諸見解が多岐にわたっている。これは、中国における龍舟競渡それ自体が多面的であり、広くかつ大きい問題であることを意味している。

中国揚子江中、下流域で盛大な龍舟競渡は、やはり「龍」との関わりが大きいように思われる。エバーハルト氏や多くの学者に指摘されたように、中国では、龍は雨と同時に豊饒をもたらしてくれる動物だと思われてきた。早くとも『左傳』には「龍見至雨」とみられ、越中の人も「当三夏旱甚之時、有迎之賽」³⁵と、干害のときは、龍を迎えて雨乞いをするのである。この龍は、雲と暴風雨の象徴であり、雲に乗り、空の生きものとして、雨を降らせる情深い動物である。つまり、人々の考えのなかでは、善い性格の龍である。だが、もうひとつ、今の中国人は全部龍と知っているが、蛟というのがある。エバーハルト氏によれば³⁶、蛟は元来水中に棲息する邪惡な、蛇に似た生物である。次に、のちに蛟の変形として河神がいる。河神（水神）としての龍は、近世のその姿は、インドのナーガーの影響をつよく受け、現在に一貫して龍王と呼ばれたものである。この蛟と龍王が、いつも悪の役割で、禍神の性格を持つ「龍」である。この龍王はインドから伝わってきたのではないかと、文崇一氏³⁷も見ている。だが、人々は既にこの三種を混同して、全部「龍」だと思っているのである。そこで、競舟に龍頭龍尾を付けるのは、龍或いは龍の同族になることによって水中にあって龍の害を受けず、競渡船は、龍の憑代として、神代そのものだと考えられていると聞一多氏が指摘したように、この龍は、禍神の存在である。だが、もう一方、(26)の事例で表わしているように、汨羅江の人は、現在でも龍頭祭になると、水夫たちは、龍頭を抱いて水に飛び下り、龍頭の水を浴びることによって、競渡の安全が守られ、禳災できると信じ、ここでは龍が靈

的な存在で、善い性格を表わしている。その他にも、湖南省の(5)や、湖北省の(29)などが、競渡の目的は水神を祀るところにあり、江蘇省の(14)、広東省の(23)などでは、豊年祈願となっている。

競渡は災厄を避けるための行事として、競技の終わりには、犠牲のための鴨や、鶯鳥などの家畜と酒とを水中に投じ、金銀紙を焼き、水流と共に魔物のさることを呪文する「送標」といった風習が各地に見られた。「武陵競渡略」には漕ぎ手は水中に「桃符」(PEACH CHARMS)と「兵罐」(SOLDIER JAR)を投ずるが、それは戦利を祈るためではなく、前者は悪魔を退散するものであり、後者は米や豆を入れたもので、処によって五月五日には声を五色の糸をつけた竹筒に入れて水中の屈原に供えたとされているが、場所によっては、色々な水死者を祀るためであると記録している。以上のようなことから、競渡は水神への犠牲の行事であったと考えられよう。

このように、龍頭龍尾を取り付ける龍舟の競渡も、水神と思われる龍の性格の変化により、時には、雨乞いや豊作祈願を目的とし、時には悪質の龍と同一になる事によって、龍の保護を受け、攘災、安全保護などを目的としているのであろう。したがって、中国南部における龍舟競渡の目的も、複雑多様で、決して単一なものではなかったであろう。

〔参考文献及び註〕

1. 出石誠彦, S12年「上代支那の神話及び宗教」『世界文化史大系3』p.170参照。
2. 聞一多,『伏羲考』「詩与神話」p.26参照。
3. 文崇一, 1961「九歌中的水神与華南的龍舟賽神」『中央研究院民俗学研究所集刊』p.59参照。
4. 白鳥清, S8-9「龍の形態に就いての考察」東洋学報第二十一卷, 東洋文庫 p.243参照。
5. W. エバーハルト著, 白鳥芳郎監訳, 1987『古代中国の地方文化—華南・華中—』六興出版 pp.210-211参照。
6. 鈴木正崇, 金丸良子, 1985『西南中国の少数民族』(古今書院) pp.191-192引用。
7. 同上 p.164参照。
8. 董仲舒,『春秋繁露』求雨の条を参照。
9. 聞一多, 1968「端午考」『聞一多全集(一)』p.236参照。
10. 君島久子, 1986「中拾文献にみる龍舟競渡—方志資料を中心として」国立民俗学博物館研究報告11巻2号 p.545。
11. 衆建, 1973「長沙馬王堆漢墓の発掘」『中国文化大革命期間の出土文物』(外交出版社・北京) 発掘された墓の主は、軟侯家三代のうち、利倉, 穉, 彭祖のいずれかの妻だと推定されている。この人の内棺が絹絵の幡(長さ205 CM, 上の幅92 CM, 下の幅47.7 CM)すなわち,「彩絵帛画」で覆ってあった。
12. 黄石 1963『端午礼俗史』国立北京大学中国民俗学会 民俗叢書102 p.108参照。
13. 同上。
14. 宗懐, 守屋美都雄訳注,『荆楚歳時記』p.149参照。
15. 君島久子, 1980「龍舟競渡考」『山本達郎博士古稀記念—東南アジア・インドの社会と文化—上』山川出版社 p.442参照。
16. 「端午礼俗史」p.107。
17. 前掲『荆楚歳時記』。
18. 黒岩義嗣,「ペーロン大系」, 池永佳昭, 1989「長崎ペーロンと南海舶」(上)『長崎談叢』第七十五輯(長崎史談会編)。

19. 君島久子, 1986「龍舟競渡—方誌資料中心」(国立民族博物館研究報告十一巻二号) pp.558-559参照。
20. 萩原秀三郎 1987『稲を伝えた民族—苗族と江南の民族文化』p.268参照
- 21.『長崎名所図繪』S 6, 長崎史談会
22. 前掲『荆楚歳時記』。
23. 前掲『端午禮俗史』参照。
24. 前掲 君島久子, 1986「龍舟競渡—方誌資料中心」。
25. 丘恒興, 1987『中国民俗采英録』湖南文芸出版社 pp.236-246。
26. 柴田恵司, 高山久明, 「長崎ペーロンとその周辺」『海事史研究』第三十八号。
27. 罗啓榮, 欧仁煊 1983『中国年節』科学普及出版社。
28. 毕堅編, 1988『雲南少数民族奇風異俗録』広東旅遊出版社 pp.258-261。
29. 桑山竜平, 「競渡と屈原」天理大学学報(学術研究会誌) 85。
30. 文崇一, 「九歌中的水神與華南的龍舟賽神」pp.81-83参照。
31. 前掲「端午禮俗史」
32. イョラン・アイマル著, 1964『中部シナ, 湖北, 湖南平原の竜船祭儀—稲苗植えの儀式に関する一研究』(Göran, Aijmer, The Dragon Boat Festival on the Hupeh—Hunan Plain, Central China : A Study in the Ceremonialism of the Transplantation of Rice. The Ethnographical Museum of Sweden, Monograph Series Publication No. 9 Stockholm 1964)。
33. W. エバーハルト著, 白鳥芳郎監訳, 1987『古代中国の地方文化—華南・華中—』六興出版 p.345。
34. 聞一多, 「端午考」『聞一多全集』第一冊。
35. 紹興縣志資料, 第一輯「天楽志」『紹興府志』。
36. 前掲『古代中国の地方文化—華南・華中—』p.210。
34. 前掲「九歌中的水神與華南的龍舟賽神」pp.58-63参照。

Ⅱ. 日本の舟競渡—長崎を中心に—

中国では、既にB.C 2世紀の「淮南子」に「龍舟鷁首」なる語が見られ、呉の『周処風土記』や『荆楚歳時記』には「競渡」とある、と述べたが、日本の場合はどうであろうか。

日本では、小松原氏によれば、競渡の記載が尤も早く見られたのは、平安朝時代の朱雀天皇の承平元年辛卯年(西暦931)、源順撰の「倭名類聚抄」であるという¹。だが、それは日本のペーロンを紹介したものではなく、中国の河南省の洛陽の都の競渡を記録したものであるという。ペーロンが実際に行なわれた記録としては、『日本略記』に「応和五月六日天皇御釣殿令侍臣競渡」とあり、その他にも、村上天皇の応和元辛酉年(天徳五年)、一月十九日と二月十二日と全部で三回、村上帝は冷泉院の池などで侍臣たちが争う競渡負態の興(まけわざのきょう)を釣殿に出御して覧られたとの史実がでている²。

日本の貴族たちは、平安時代から、当時の社会の中心とした遊楽思潮として、外来文化を取り入れて詩歌管弦の才を彩り、寝殿造りの邸内の池で龍頭鴨首の舟にのって、楽しんでいたのである。上中古文学作品中、龍舟を最初に記録したのは『落窪物語』であろうと、黒岩氏は指摘している³。『落窪物語』、『栄華物語』などが龍舟を記しているが、その他に『源氏物語』の胡蝶の巻が紹介しているので、それぞれ引用したい。

「三月の二十日余りの頃ほひ、春の御前の有様……唐めいたる船造らせ給ひける。急ぎさう

ぞかせ給ひておろし始めさせ給ふ日は、雅楽寮の人召して、船の樂せらる。……龍頭鷁首を、唐のよそひに事々しうしつらひて、梶とり棹さす童べ皆鬢ゆひて、唐土たたせて、さる大なる池の中にさし出でたれば。……

鳥蝶にさうぞきわたける童八人容貌に櫻をさし、蝶には、金の瓶に山吹を、同じき花の房もいかめしう。世になき匂ひを盡くさせ給へり、南の御前の山ぎはより漕ぎ出でて、御前に出つるほど、風吹きて、瓶の櫻少しう散りまがふ。いとうららに晴れて、霞の間より立ち出でたるは、いと哀れになまめきて見ゆ。」

と、龍船の推進器が棹で、それを小童が操る。乗船者のすべてが、貴族を満足させるために特殊の服装をし、ミズラ結び、唐めかせたことを記している。この龍頭鷁首の舟は、宗教的なものでもなく、権威を示したりする政治的な意味もなく、ただ貴族たちの趣味にあった遊戯的なものに過ぎないのは、明白である。そして「唐めいたる船造らせ給ひける」、「龍頭鷁首を、唐のよそひに事々しうしつらひて」などの記録からも、これは、日本の上代文化の創造ではなく、中国の「龍舟の戯」の模倣であった。

日本では、昔から櫓や棹に頼る和船競技が行なわれていた。古い文献の上では、競渡について『古事類苑』にわずかの事例が列举されている。その中に、吉野宮に御幸せられしとき人麿の長歌の一節に「大宮人は舟まめてあさ川わたりふなぎほひ夕かは渡此川のたゆることなく」とあるが、「舟ぎほひ」は名詞でなく「舟ぎほふ」という動詞であるのみならず「舟なめて」の対句として舟の蟬集する様を詠んだものに他ならないと、中村氏が、その「競渡考」⁴で、万葉集の巻一に柿本人麿の歌を「舟競ひ」の個処に挙げられるのは、間違いであって、ここでは、「競渡」のことを言っていないと指摘している。千蔭の『万葉集略解』には「舟ナメテは並べてなり、駒ナメテも同じ舟ギホヒは競ひ漕ぐなり。云々」と、「舟競」（ふなくらべ）がでてくるが、それは、単に舟が並んで進んだことをいっているだけで、何も「競渡」ではないと、黒岩氏⁵も反対の意見を出している。『倭名鈔』にも「競渡（布奈久良倍）楚国風也」が見られ、平安朝にはすでに楚国の風である「競渡」を知るようになったと、桜井満氏が述べている⁶。

当時は、「唐めける」ことを尊重した時代傾向であったので、櫓を推進器とした競渡風習は、その他の中国文化と同様に、日本の貴族たちに受け入れられた。このように、競渡は中国から輸入されたと考えたほうが妥当であろう。だが、櫓を推進具とし、逆漕法をなす櫓を櫓のほかに加えた和船競技は、その後、漁村などの民間習俗として、代々伝承されているのである。

小松原氏は、日本における競渡船（ボートレース）の風習の伝来について、その渡来系統を四つに分類している⁷。

第一次は、奈良朝末期（七一〇～七八四年）に日本の近畿地方へ波及し、貴族的な宮廷行事となり、まもなく衰滅した。

第二次は、台湾に伝わった爬龍船（パーロンチェン）である。

第三次は、室町時代（一三九二～一五七三年）沖縄に伝わったハーリーである。

第四次は、徳川初期に九州の肥前に伝わったペーロンである。

伝播経路としては、長崎→深堀・野母（樺島も含む）→茂木→天草島・富岡（or 樺島→富岡）→下島沿岸→熊本葦北郡の田之浦・湯之浦・佐敷・水俣・津奈木→鹿児島県米ノ津・鹿児島へとしている。

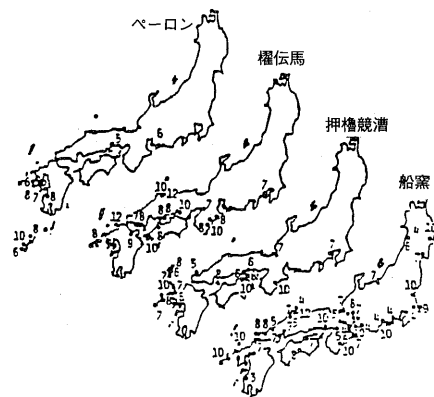
その他の競舟習俗については、たとえば壱岐・対馬の「舟ぐろ」という押櫓競舟や若松の「ペーロン」などは、山陰や紀州の諸手船（モロタブネ）の古統や瀬戸内海の櫓伝馬（カイデンマ）、その他封建時代の諸藩の水軍、海賊、倭寇などとの関連は辿ることができるが、ペーロンとの直接交渉は確かめられないという。

一方「宗像大社の末社、七十五社の一つに御船上神社があり、その正平、応安、宝徳各神事には、御船上祭が記されている。また『続風土記拾遺』十八に「また向かい田久村の境内に御船漕社有」とある。これによると、既に十世紀には宗像宮に神事用の船があり、また船漕神事が行なわれていた可能性もある」と、柴田・高山氏は、「長崎ペーロンとその周辺」⁸において、述べている。更に両氏は古くから行なわれてきた競船が今日に伝承されており、例えば、熊野諸手舟神事や各地の押櫓や櫓伝馬の競漕などの伝統的素地が既に確立していたために、中国から渡来した龍舟競渡行事をスムーズに受け入れ、今日のペーロンに発展したものと考えられると、違った角度からではあるが、中村氏や黒岩氏の意見に賛成している。また、両氏は、日本における競船及び船祭りの分布を開催月に合わせて、以下の図にまとめている。

これによると、漕手が前面をむいて櫓を操作する順漕法、および、漕手が船尾側に向う西洋式漕法の櫓伝馬のほか、櫓船による対馬、壱岐の船ぐろ、岡山各地の押し舟などが、全国に分布していることがわかる。また、競船行事が西国ほど盛ん⁹であり、ペーロンも九州（特に長崎あたり）以南の地域に多く見られる。

いまでは、櫓の競船をペーロンといい、長崎・彼杵・高来地方に盛んで、櫓の方はフナ（船）グロとかフナゴロとかいって、北松浦郡・壱岐・対馬などに広く見られる¹⁰と、考えられている。

では、この中国の龍舟競渡が、いったい、いつ、どういうふうに関わってきたのかを、長崎ペーロンを中心にみたいと思う。



（図1）日本における競船及び船祭の分布（数字は開催日を示す。柴田・高山「長崎ペーロンとその周辺」より）

〔参考文献及び註〕

1. 小松原壽, S37 「ペーロンの祭日について(1)」『長崎論叢』第四十輯 p.63参照（小松原壽は黒岩義嗣と

同一人物である)。

2. 小松原壽, S31「天草のペーロン志」(天草民報社)。
3. 「ペーロン大系」(4)長崎日日新聞, 昭和四年五月一日から同年九月十四日まで連載。
4. 中村哲, S19「競渡考」『民俗台湾』4-5(古亭書屋)P.42。
5. 同上「ペーロン大系」(12)。
6. 桜井満, 「船祭りの系譜」『國学院雑誌』83巻11号 P.268。
7. 前掲, 「天草のペーロン志」。
8. 柴田恵司, 高山久明 「長崎ペーロンとその周辺」『海事史研究』第三八号。
9. 日本の船競漕の分布は, 西日本に偏ることは, 海野清氏の研究(「船競漕の民俗一事例を中心に」『民俗学評論』S55, 18-19大塚民俗学会)によっても明らかにされている。
10. 山口麻太郎 S48 42『日本の民俗・長崎』第一法規出版 P.194参照。

1. 長崎のペーロン

日本は古くから中国と深い関わりをもってきた。長崎は, 1639年(寛永16)の鎖国令により, 外国との唯一の貿易港と限定され, 鎖国下の日本において, 世界に開かれた唯一の窓口として大きな役割を果たしてきた。このため, 長崎市の風俗習慣や年中行事の中に, 外国の影響を受けたもの, または, 日本化された帰化風俗も多くあり, 中国から伝来したペーロンもその中のひとつと言える。

(一)、ペーロン その名称と由来

早くから, 元禄時代の俳人一介は「長崎の端午」と前詞して, 「麻絹も分限ン也けり競ひ舟」(海表叢書「異国情趣集」)としている。徳川末期の女流俳人で長崎に遊んだ菊舎に「渡る跡はもとの海なり競ひ舟」とあり, 長崎のペーロンを詠んだ俳人は少なくなかったであろう。

ペーロンは, 長崎の歴史民俗資料館の長崎民俗年表には, 「明暦元年, 一六五五年, 唐人初めてペーロン競漕をする。以後長崎の年中行事となる」とあり, 従来多くの人は, 長崎ペーロンは江戸時代の明暦年間(一六五五年)に初めて中国人によって伝えられたと信じていた。

古賀十二郎氏¹⁾は, その『長崎市史』の「風俗編」のなかで, 『長崎実録大成』(第十四巻年表挙要明暦元乙未年(一六五五年)の条に, 「去冬ヨリ当春迄唐船数艘出帆相滞ニ付為船祭唐人共端船ニテ競渡ヲ為セリ此後市中ノ者共見習テ年々パイロン船ト唱へ小船数艘ヲ進テ權を撥シテ其先後遅速ヲ競テ船祭ノ式ヲ成ス。」と, つまり, 明暦年間の中国人船乗りによって初めて伝えられたというのである。それに対し, 古賀氏は, さらに「それが長崎に於けるペーロンの嚆矢であるとは断じて認め難い。」とし, 平戸の英商館長リチャード・コックスの日記(Diary Richard Cocks), 一六一七年五月二十八日の条から, 当時すでに長崎では, 平戸住民も唐人同様に競渡を行なったことを述べている。また, 一六〇三年長崎板『和葡字書』にも競渡を「セリアイ」と記している。これで, 江戸初期に長崎では既に競渡行事が行なわれていたことが分かったとしている。

『長崎市史』や『長崎市政65年史』などの記録によると, ペーロンは南支那の唐人が長崎にもたらしたとされ, 南支那の唐人というのは, おそらく福州の唐人達とみなされる。

では, ペーロンという名称の起源とその意味は, いったいどうなっているのだろうか, 学説を

見てみたいと思う。

(1). 古賀説

長崎競渡船（ペーロン）に呼称については、古賀十二郎氏が、その著書の『長崎市史』で、次のように説明している。

『唐通事日録』や『長崎見聞録』、『長崎名勝図絵』などの記録にハイロンとあり、ペーロンと記していない。だが、松浦静山の『甲子夜話』にはペイロンとある。これは、来舶唐人の出身地において発音が一定していなかったためで、ペーロンという唐音は本邦だけでなく中国の福州地方にても称えられていた事が明白である。そして、『長崎見聞録』に「刈龍」という字を書いてはいろんという。『長崎歳時記』に競渡の唐音はハイロンというの両者に対し、「刈龍」がワロンかパイロンと誤り称えられたという説も、また競渡の唐音をパイロンであるという説も、皆いずれも誤っている。ただ、龍は龍船の略で、「ロン」との発音は妥当である。また、南中国では、白龍船或いは舩龍船などがあるが、いずれもペーロン（or ペイロン）またはパイロンの原字と断定できず、白また舩は音のみを写した仮字であって、別に原字があるのではなかろうかという。

(2). 本山説

広東地方では、長崎のペーロン船と略同型の舢板があり、それが「白龍」と呼ばれ、競渡船として使用されていたことなどから、「白龍船」（ハイロンチョン）はペーロンの語源であろうという⁴。ハイロンが轉訛してパイロンとなり、ペーロンともなり遂にペーロンとなった。現在でいうペヤーロンはよくその変遷の経路を示している。

(3). 黒岩説

黒岩義嗣氏は、その『ペーロン大系』(88)（昭和四年九月四日）で、次のように記している。

「武藤長蔵氏がペーロンの漢字について、手篇に八「舩」説と呼ばれてから十年にして漸く実現される機運が向いてきた。私は私の最も力を注いだ『ペーロン名称異説』の数十枚の稿を遂に発表し得なかったが、武藤氏説に賛意を表わす者である。南方支那と台湾とで「舩龍」の文字を使用している。……八月の下旬、私は現ペーロン会長山野辺幸家氏と会見して、……山野辺氏は私に聞かれた『ペーロンの文字はどう書くのが正しいのでしょうか。』『手篇に八です。』と私は答えた。」

黒岩氏は、大正十四年に出版された古賀氏の『長崎市史風俗編』より以前の武藤説に賛同し、ペーロンの漢字は「舩龍」が正しいとしている。

(4). 池永説

池永氏は、その「長崎ペーロンと南海船」²で、ペーロンのペーは南海に関する中国史料に多く出てくる「舶」との比較から、元来マレー語で船を意味する「パイ」or「ペイ」に由来すると推定している。つまり、「舶」（普通は大型貿易船を云う）は、中国語では船の意味で、読み方は舶の傍の部分の「白」が発音を表わしたもので、地方によっては、bai（北京）、pe（福州）、pei（蘇州）と発音し、マレー諸島方面の船の音パイが中国に入り、「舶」という字が作成されたのであろう。ロンのほうは龍のことと思えるので、ペーロンとは「龍の船」を意味するという。

このように、日本では、「パイロン」(划龍)『長崎名勝図絵』,「ハイロン」(刈龍)『長崎見聞録』,「パイロン船」『長崎実録大成』,「ペイロン」『甲子夜話』,「扒龍」(黒岩説),その他,「ピャーロン, カイロン, キャーロン」などの方言がある。中国では,「水戯」,「争標」,「奪標」などの意味から取ったものと,「爬船」(湖南省),「爬龍船」(広西省,福建省),「爬船」(湖南省),「桴龍船」(四川省),「扒龍船」(台湾省)などがある。池永氏が述べたように,ペーロンの語源はマレー語にあるかもしれないが,中国では,主に端午節に行なわれ,そして各地に広く伝わった「划龍」などのいずれもが,「龍」或いは「龍船」の前に,この動作を表わしたものがくることが多いと思われる。ただ,中国各地にでも統一な名称がみられなかったことと,長崎に入った唐人が福建人だけでなく,その他の地方の人も考えられるため,長崎のペーロンにも,統一できるような漢字を当てはめることが難しく,やはり「ペーロン」と表記したほうが,よからう。このように,ペーロンの語源を追及することにより,ペーロンそのものは,中国から日本に入ったということが,更に明白になった。

2. 長崎のペーロン船

古賀氏³は,「ペーロンは,ボートレイスの如く,船の進行の遅速を争ふて勝負を決する一種の競技で,往時南支那の唐人が長崎に輸入した風習の一つである」と,長崎のペーロンについて述べる。

『長崎名勝図絵』には,ペーロンについて「按ずるに,パイロン舟を龍船と云ふは,昔唐土にて船の首を龍に象りて造りたるなるべし。おもふになほ船の鶴首あるがごときか。

また按ずるに,五月の時候に当って崎江に繋ぐ華舶(とうせん)端舟(はしふね)を泛べ(端舟,中土の俗語にて杉板と云ふ)梢子等櫂を入れて遅速を争ふ。これ汨羅の遺風なるべし。今吾が崎の風俗となるも,また一奇事なり。」という。

ここに,船の首に龍に象って,造るとあるが,この龍舟と競渡船については,『清俗紀聞』⁵に,(A)「五月朔日より六日まで江湖ある地方は数艘の龍船(ロンジェン)を浮かべ競渡す。船は長さ五,六間,はば二間ほど艦(へさき)に龍頭,艫に龍尾を造り船の全舳に龍鱗を描き都て彩色を加え,龍の,水上に浮かみたる勢いにかたどる。」と(B)「福建地方にては,長さ五・六間ほど,はば一間余の船を拵え競い渡す。龍頭そのほか旗飾等はなく,銅鑼・太鼓等打ちならし,数十人乗組み競い渡す。」の二種が記録されている。この(A)(B)両種の龍船は,長崎に伝わっていると古賀氏⁶はいう。(B)は,いまのペーロンで,(A)は,諏訪神社祭礼の山車で,蛇船(陸上龍船)という。この龍船は,今でも,諏訪社神事の挽物で異彩を放てる西浜町の龍船の遺風を偲ばせ,ただ,長崎の海上にこの種の龍船を浮かべたことがあるかどうかは,不明である。

(A)型の陸上龍船について黒岩氏⁷が,次のように述べている。

「海に海上龍頭船があれば,陸にも亦陸上龍頭船がある。長崎の諏訪神社祭礼に出る山車の一種の蛇船は,現今我国に於ける陸上龍頭船の代表的なものである。」

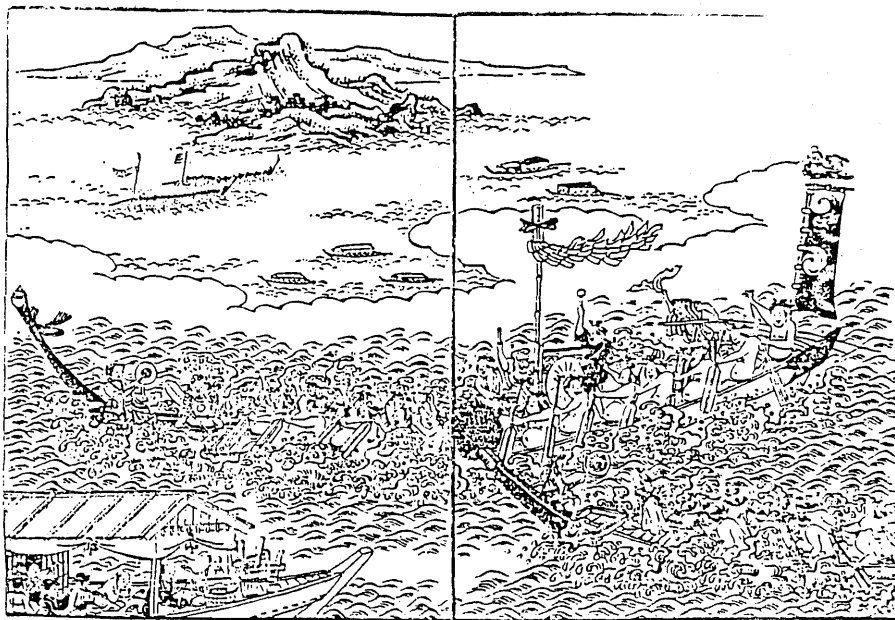
また,氏は,龍舟に対し,①舟遊用,②祭祀用,③戦艦用の三種説⁸を出し,今日の日本では,舟遊用と戦艦用の龍頭船は,既になくなり,あるのは祭祀用のものだけで,それは,また海上に

泛べるものと、陸上を曳き廻すものの二種に分かれる。前者の例は南紀の新宮の龍船、京都嵯峨の車折神社の龍船で、長崎諏訪神社祭礼の蛇船は、後者だという⁹。前述のように、黒岩氏は日本の競渡船の渡来系統を四分類しており、南紀の新宮の龍船などは、おそらく第一次の渡来に属されるもので、平安朝時代の貴族間に収容された龍船の戯の変移した痕跡であるのに対し、(B)型の龍船は、開国時代の後、長崎方面から輸入された民間的な舟祭りの刈龍船で、第四次渡来のものであろう。

このように、中国でも、競渡できる龍船（大きく、緩慢）とできない龍船（小さく、軽捷）があるが、『清俗紀聞』に記録された(A)の龍船から、長崎の西浜町の蛇船に発展したこの龍船は、恐らく競渡できない龍船の方に属していたかもしれない。

(B)型競渡船用龍船について、江戸時代の長崎の競渡船については、『長崎名勝図絵』（文政年間1818～1830年の編集）と『甲子夜話』（文正五年1822年）に記録されているので、次に、引用してみたい。

まず、『長崎名勝図絵』¹⁰には、「刈龍（くはりゃう、パイロン）は五月五日六日なり」と、競渡の行なう期日を、五月五日、六日、端午の日とし、「これ汨羅の遺風」と述べてから、



（図2）龍船（パイロン）（『長崎名所図絵』より）

……年々端午にはこの町の内または近き浦々より龍船を出して渡りの遅速を競ふ。船の製、平生用ひる所と同じからず。内外殊に窄く、およそ長さ二十四、五尋より三十余尋に至る。市中または海辺の壮夫饒勇強力なる者を選び乗組みとする。一艘ごと四、五十人あるいは六、七十人、船の短長によりて人数を定め皆裸体にし船内に倚座し、左右に排列す。また舵工あり、艫に立つ。

これ特に巧拙ありて、老功の者の司る所と云ふ。両船約をなし既に競んとされば、双方頻りに銅鑼太鼓を鳴らし、各声を揚げて打櫂を入れ水を掻く（競に三般競あり四般競あり）。その形百足のごとく、行く事矢よりも駛し。……鱸に町記・浦記あり、幡簇幣・堰月刀のごとき建つ。また競船一艘ごとに庖厨船を泛かべ飢渴に備ふ。大小の見物、艇は崎江に充満し、あるいは岐を擁し婦を携へ、洪波に汜濫して夕陽の没するを知らず。これ他邦に比類なき壯觀なり。……と。

「殊に窄く、およそ長さ二十四、五尋より三十余尋に至る」舟は、互いに、「遅速を競ふ」のが主の目的のようである。

では、『甲子夜話』¹¹はどうであろう。

「一、「舟の長さ大は十間内外、夫より六七間、小は三四間ほどなり。

二、此舟は常と異にして、はば狭く、たけ長し、これ軽くして疾きを主とすればなり。因て常は無用にて圍置なり。舟の形鯨舟の如し、又当地の猪牙舟に似たり。

三、舟の舳先に其町々の目印を造る舳を黒く塗、白朱などにて様々のものを繪く。

四、舟の中央に銅鑼一太鼓一つを懸け、此拍子にてかけ引きをなす。……

五、舟中に頭立て功者なる男、紙の采配執て指揮す。

六、大舟は舟の片側に二三十人、左右六七十人ほど、皆櫂をつかふ。中舟小舟は人数の多少有りて、小舟には十三四歳の少年のみもあり、是も櫂二三挺ほど也。……

七、年々定日、五月五日六日両日にして朝五つ前後に始り夕は暮れに及んで止む。……

八、又大船の競争には鱸の方より大綱を引き、壯健なるもの数人舳の方へ引くかかれば舟の迅速を助くなり。……」

と競渡の行なわれる時期、場所、由来、舟のサイズ、人数など、詳しく述べているわけである。

二つの記録とも、ほぼ同時代に書かれたものであるため、以上の内容は、だいたい一致している。『夜話』は、舟は当地の猪牙舟に似たりというが、柴田・高山両氏の研究¹²によると、天ト船の小型のものを猪牙と呼び、また鯨船と天ト船は船型的に近縁である。なお、当時のペーロン船は、江戸時代の漁船を延長した形をしており、長崎近郊で使用されていたインコロ船と称する漁船に近い船型をしている。インコロ船は、江戸期漁舟の基本的船型であった天ト船を細長くし、高速力を狙った船型である。これから見ても、静山が猪牙に似たりとしたのは明らかに天ト船であろうとの結論を出している。一方、『長崎市史』には、長崎在泊中の唐人がその舳板を用いたのがペーロンの始まりとあるが、夜話に龍頭龍尾をつけたとあるので、これは、おそらくペーロンは初めは鯨船等の軽快な漁船で代用していたが、次第に専用の船型が考案されたのであるという。

現在の長崎のペーロン船は、「長さ七尋（約十三メートル）定員三十六人と定められている。既ち漕手三十一人に、あか取り（水を汲み出す者）、太鼓打ち、銅鑼打ち、揖取りがそれぞれ一人ずつ、それに指揮者が一人乗り込む。号砲を合図に各船は一斉にスタートをし、指揮者は「ペーロン、ペーロン、エッ」と叫んで調子を付ける。十六歳から二十四歳までの青少年組、二十五歳から四十歳までの壮年組とし、各組の優勝を競う。」¹³それに、「ウシ（舳先でタテブともいう）に剣や

天を描き、中央の柱に幣帛や長刀を飾る。……港内往復2,400 M のコースを競漕する。」という¹⁴。

以上をまとめると、以下の表となる。

	船形	長さ	乗組員数	舳先文様	舵の形式	太鼓	銅鑼	龍頭龍尾	期 日
江戸時代	窄長	(大)50 M	六一七十人	町・浦印	櫓	中央	中央	○	五月五日、六日
	窄長	(小)5.5 M	二十三人(少年)						
現 在	窄長	(定形)13 M	三十六人	剣、天	櫓	中央	中央	×	六月の第一日曜日

備考：寸法は、 $\frac{1}{2}$ に換算したものである。

このように、江戸時代のペーロンと現在のとは、そう変わりがなかったことが分かる。ただし、昔は大舟、中小舟があったのに対し、現在は舟の大きさと乗組員などがほとんど定められたものとなっている。龍頭龍尾を象ったものがなくなり、端午の節に行なわれていた期日も、六月の第一日曜日と決められた。ペーロン自体同一化されていた。

中国から伝わったペーロンは、次第に長崎の人たちに受け入れられ、鯨船等軽快な漁船の使用が専用な船型が定められ、長崎の海手三十六町によるペーロン行事は、長崎の夏の行事として定着し、港内ペーロンの第一次最盛期を迎えた。しかし、この行事が年々派手になり、熱狂的なあまり、享和元年など度々禁止されたが、これをきっかけに、海手三十六町の漕手として雇われた水夫達が近隣の漁村に広がり、更に、長崎市茂木から海を越え天草富岡ペーロンに、或いは米ノ津競船（セリブネ）などになったと伝えられている。

3. 期日と地理分布

『長崎名勝図絵』と『甲子夜話』に、競渡の長崎ペーロンの行なわれる期日については、「五月の五日、六日」と記してあり、また、元禄時代長崎に滞在していたケンペル¹⁵が、[The first of June was a holiday with the Japanese, which the Dutch call Pelong.]と記し、日本では、五月の最初の日が休日、オランダ人はペーロンと呼んでいる、としている。『長崎市史』では、「今猶を盛んに行なわれている。もっとも端午の佳節を中心としてその前後に行なわれ自余の季節には決して行なわれぬことは、昔も今も同一轍である。」という。

だが、『市史』に対しては、訂正すべきとの意見を黒岩氏が出している。氏は、長崎のペーロンは四月、五月、七月や八月に行なわれる例が少なく、五月五日、六日と昔から決定されていたわけではない。大概是、六月中旬以後に港内で行なわれ、夏がくると誰がいう事無く、好事者が主唱して寄り合いをし、日取りやその他の申し合わせをするのであって、六月の中旬の日曜日に行なうことは、ほんの最近のことである。だから、「自余の季節には決して行なわれぬ」とあるのは、「自余の季節に行なわれることもある」と直すべきだと指摘¹⁶している。

このように、長崎地方では、端午祭が各村、郷、町などの環境によって、ペーロンの行なわれる期日が変化していった。

ペーロンが行なわれる場所としては、黒岩氏は（「ペーロン大系」(1)）、イ、港内ペーロン競渡地、ロ、港外諸島競渡地、ハ、彼杵半島競渡地（外海地方、裏半島）、ニ、大村湾競渡地、ホ、

野母半島競渡地、へ、千々石灘方面競渡地などと分類している。

ペーロンの行なわれる場所と関連して、長崎地方のペーロンの行なわれる期日（旧暦とする）を大別¹⁷すると、以下のようとなる。

①五月五日：

(A)龍宮祭：（6月5日前後の日曜日）

彼杵半島の福田丸木、舟津、瀬戸；西彼杵郡の茂木町、長崎市の戸石町、牧島町など

(B)漁祭：（6月5日前後の日曜日から、第二日曜）

彼杵半島の福島；西彼杵郡の時津町岡町、網場町；炭坑松島釜之浦；大村湾方面など

(C)水神祭：（8月13～15日）

西彼杵郡の野母崎樺島、脇町、野母など

②六月一日（現在7月第一～第三日曜日）

(D)農業祭：（足洗、作上り、ハゲ祭など）：野母半島の小ヶ倉；裏半島の高来郡の戸石、矢上村など

③六月不定日

(D)農業祭：長崎市福田本町、小江町、柿泊町、手熊町、三重町；西彼杵郡の大瀬戸（町雪浦、大瀬戸、向島、福島）など

④七月十五、六日（お盆）

(E)雨乞い：西彼杵郡の琴海町西海、戸根、形上、尾戸、長浦など

⑤八月一日

(F)悪祓い：千々石灘の有喜村

⑥九月

大村湾の臨村喜々津村の舟津

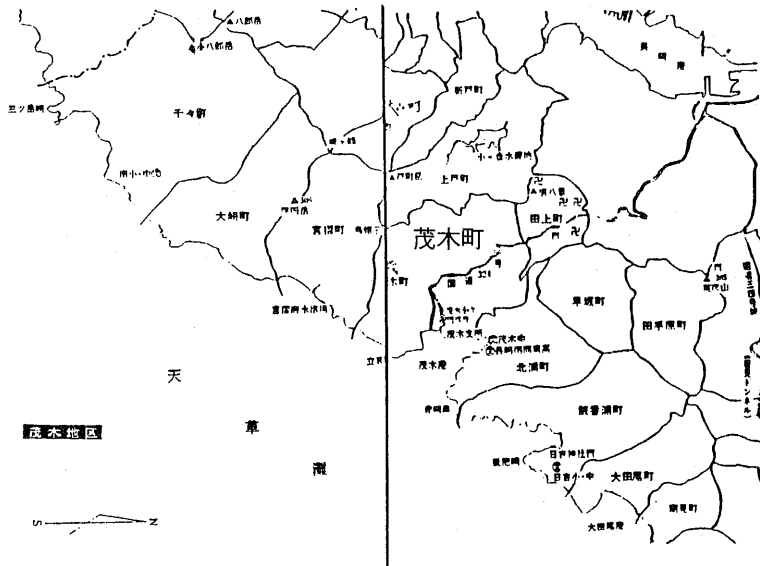
これで、長崎のペーロンは、中国龍舟競渡と同じく、決して五月五日のみではなかったことがわかる。地理的には、『市史』によると、長崎の人が唐人から習ったペーロンは、長崎海手の三十六町で盛になったが、喧嘩などで禁止されたため、西彼杵郡外海方面、稲佐、立神、水浦、戸浦、小瀬戸などで盛んになり、今日に至っている。その中に、龍宮祭や、雨乞い、漁、農業を祈願する儀礼が伴うのが多く見られた。私は、1989年の六月に、かつて長崎国際ペーロン大会にも参加した野母半島に位する茂木地方のペーロン及びそれに伴う龍宮祭を調査してきたので、ここで、報告したい。

4. 茂木地方のペーロン

端午の節句に行なわれる年中行事の一つとして、長崎に入ってきて以来、民俗行事としての要素が少しずつ減少し、「ボートレース」の名前の如く、すっかり競技化、スポーツ化と変化してきた、そして、かつて、長崎の夏を象徴した市民的祭典としての仏教的祖先の祭祀—盂蘭盆会と、神道の祭典—祇園祭の序曲をなすものとされる、つまり長崎の初夏を告げるものとしての海の祭礼—ペーロンが、現在、長崎地方では、どのように行なわれているのかを調査してきた。それを

調べることによって、長崎のペーロンの変遷、及びその実態を見てみたいと思う。

今年は、七月三十一日に国際ペーロン大会が長崎で行なわれ、その前に、各地区ごとにペーロンが行なわれていた。国際ペーロン大会に選出するため、多くの地域は、六月に入ってから、予備練習も含め、レースに励み始めた。その中では、六月十一日（1989年、六月の第二の日曜日）に、行なわれた茂木地区のペーロンは、競技化の要素のほか、比較的古いものが遺されている事に気づいた。ペーロンに伴う神事については、茂木神社の神主の藤田稔氏、ペーロンについては主に、長崎ペーロン協会の理事の小林島男氏と、かつて三菱長崎造船所に勤務された西田鉄善氏などにインタビューした。



(図3) 茂木地区図(『長崎事典』1982年より)

旧茂木村、茂木村田上名・本郷名には縄文式時代の遺物、又、玉台寺境内・千々名から弥生式時代の遺物が出土しているので、文化面では古くから、朝鮮などの影響を受けていたことが分かる。1962年、長崎市茂木町となり、また1971年に、名前が更に変更し、茂木町、田上町などの十カ町になり、一万五千人の人口がある。その内、漁業と農業に従事する人の割合は半々くらいで、最近兼業の人口数が増えている。小松原氏が「天草のペーロン志」で、徳川初期の第四次ペーロンの伝播経路として、長崎のペーロンは茂木地方を通して、天草島や鹿児島などの九州地方に伝わったのだと指摘しているが、茂木は、当時中国から来るには長崎港よりも近く、地理的には長崎港湾の奥深くにあり、波も静かであるため、中国から来る船舶にも多く利用されていたことであろう。茂木の由来は、神功皇后が茂木に上陸され、衣裳をつけられたから、裳着といい、それが茂木になったとか他にも色々な伝説があるという¹⁸。

次に、茂木のペーロンとそれに伴うペーロン樽納め神事について述べたい。

＜神事名＞ ペーロン樽納め神事

＜神社名＞ 裳着神社

＜斎行日時＞ 毎年新暦六月五日男の節句

＜斎場名及び所在＞ 茂木港口の龍宮岩と海上

＜信仰由来＞

茂木町の漁業部落では、今から400年前の昔からの伝統行事だと伝えられている。茂木の漁師の若者達が、龍宮岩に祭る海神に海上安全、大漁豊満の祈願報賽の為、船競いの勝負を決定し、日頃耐えた技を神々のご照覧に供え、其の結果いかんによって、その年の豊作豊漁を占う予祝の行事として行なわれてきたものである。

＜信仰の分布＞ 茂木町漁業部落（橋口，中，寺下，新田の各町）

＜神事の解説＞ 毎年六月五日新暦の男の節句（現在では六月第一日曜日）に午前七時ペーロン行事の安全祈願の為、氏神さまの裳着神社に朝詣りをする。

朝7：00、子供二十人を挟んで、旗をかかげ、銅鑼や權、奉仕物としては、キャベツやバナナなどを持って、茂木神社に到着し、右の図のように並ぶ。

茂木神社

7：04－7：15、今回のペーロンも安全であるよう、子供を守るようにと神主のお祓いの言葉が始まる。そして、大人代表一人と子供代表一人がお参りする。神主は、ご幣を振って、災いを払う。当番の町は子供のペーロン舟のヒョコサン舟（兵庫サン舟

成人
25歳

子供
3-5歳

青年
5-18歳

一神職託問兵庫による）を二隻を出し、子供（三歳一五歳、六歳の幼児（男）も半天、鉢巻き姿で權を持ち、親たちに抱かれて）が参加する。ペーロンに参加する人皆がお祓いを受けてから、神社を出る。

ヒョコサン舟は、毎年新しい舟を使用し、ケガレのない子供達が実際に權を持って舟を槽ぐ。だが、子供だけの力では、鈍いので、舵が櫓になっていてそれを大人が操作する。

神社内のお参りが終わってから、神主は、直ちに川辺に出迎えられ、人參や大根などを載せたヒョコさん舟に乗り、青笹竹のさしてある竜宮岩に向う。やがて、岩瀬に到着し、石祠にご幣とシメ縄を取り替え、瑞々しい背笹を差し立てて神饌をお供えし、祈願祭をして再び舟に乗り込み龍宮岩を離れ、遥か沖合へ舟を出して、停船し、海上を清払いし、大払詞を奏上して、朱のシメ樽の神酒を大海に注ぎ、神酒をつめた青竹筒に掛け鯛を二匹結び合わせ石のおもりを付けて、海上安全と漁船の操業の一年の安全を祈念して、海中へ鎮奉る。海上の祭典を滞りなく終えて、大漁旗をなびかせた漁船が四、五隻援護し、港へつき、神事を終える。

＜神饌＞神酒1升，米，塩，鯛二匹，野菜，果物。

＜神具，祭器具，執り物，特にこの神事で使用するもの＞

三宝、五台、朱のシメ樽、神酒をつめた二本の青竹筒に掛鯛二匹を結び、石の重りを付ける。笹つき青竹一本、龍宮岩石祠のシメ一本、ご幣一本、払いの大麻一本、玉串4、5本

<俗信> (禁忌事項その他)

このペーロン樽納め神事が終わらぬと茂木漁業青年のペーロン競争は行なわれない慣わしとなっている。

<参加者の衣装、年令別、食事>

男青年25歳代20名くらい。ランニング・シャツ、パンツ、鉢巻き姿の衣装など、統一したものではなかった。男幼児3歳-5、6歳は、半天、パンツ、鉢巻きを付け、小さい櫓を持たせ「ピャーロンピャン」と親に抱かれて水をかかせる。小学生男子8歳-12歳も約30名ランニング・シャツ、パンツ、鉢巻き姿で櫓を持つ。

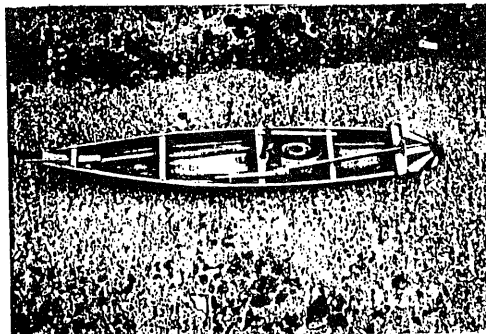
地区の婦人部の人たちが、えびの天ぷら、太刀魚の唐揚げ、おにぎり、かまぼこ（魚のみんち）ちくわなどのお祝い食物を作る。選手、子供、役員たちが、終わったら、このハレの料理を食べる。

<ペーロン行事>

ペーロン樽納め神事が終わると、四集落の茂木漁業青年のペーロン競争が正式の審判の下に午後から、二、三回実施され勝負を決める。

海上祭典の終えた海域で、ブイを立て、範囲を決め、往復2,000Mのコースを競う。舟は三組で（赤、白、青-みよしの色）、競り合いし、立てられたブイを廻る。三組はそれぞれ三隻の舟に乗り換えて競い合うため、全部で、三~五回が行なわれる。舳先には町印がつけてあり、龍頭龍尾の姿は見えない。乗組員は、二十九名で、その内、船頭から、太鼓叩き一名、あか取り一名、銅鑼打ち一名、船尾に舵取り一名とが乗っている。舟の一番先に乗る人は、端先（ハッサキ）といい、細長い櫓をかく。最後尾の二人を刎櫓という。舟の中央の柱にチームを代表する色の旗がついている。舟旗と同色の鉢巻きを頸に巻き、赤、白、青と三チームに分け、指揮船の号令で、「ドン、ドントン、ジャン、ジャン」といった調子で、一斉にスタート。長崎ペーロン大会に参加する舟は、みな登録されたサイズを持つ。今は漁船だが、昔はサンパンでやっていた。今の舟は、柳の葉のように、幅狭く造っており、昔はもっと、広かったという。勝つ条件としては、三色の舟の質と三組の人の質による。

（図4）茂木ペーロン船の構造



この日は、お正月にしか立てない大漁旗をたて、年に一度の龍宮祭のハレの雰囲気を感じさせる。観衆は長い沿岸に約1,000人余りの応援の見物人で賑わいを見せる。昔は、囃子言葉としては、勝った人が負けた人に「ナエチョラセン

カ」(萎えているのではないかー力が弱っているのではないか)、これは長崎方言である)と叫び、たちまち喧嘩の原因となったという。そして、行事が終わると舟を引き上げて浜辺で歌や踊りが出たいへんな賑わいであったが、昨今は夕方近くにペーロンが終わり、地域の婦人部の人たちが作ったハレの料理を食べて、お祝いをするだけにとどまっている。

ペーロンの主催は、青年団によるもので、もちろん経験の豊かな年寄の指導下にある。小林理事は、若いときはハッサキを努めたことがあり、大変経験豊かな方で、今回のペーロンの実際の指導者になっている。ペーロンおよび神事に伴う費用は、長崎市ペーロン協会の方からほんの少しの援助が出るほか、すべては町の寄付で、皆の手出しによるという。つまり、費用のほとんどが村の人々の私費によるものである。

このように、現在の茂木地方のペーロンも、龍宮祭の行事に伴い、「終わらぬと茂木漁業青年のペーロン競争は行なわれない」ほど、大事である。茂木の人々は、古くから龍宮岩に龍王が棲んでいると信じているらしい。毎年、ペーロンの日となると、龍宮岩にいき、龍王を塩、米と酒で供えて祭る。そして、ペーロンの安全を祈願する。茂木ペーロンの目的は海上安全、漁業安全の祈願である。天候により、早魃のとき、雨乞いの意味もあるが、戦中、茂木ペーロンは中止となり、ペーロンは姿を消したが、当番町の樽納めの神事だけは行なわれていたという。

西田氏によると、茂木地方では、もとは、端午の節句にペーロンが行なわれていた。そして、屈原を祭るものだという説も広く知られていた。何しろ、昔は、人々は粽を食べながらペーロンを見ていたからである。戦争の為一時停止したが、戦後昭和三十年から、期日が今の六月の上旬になり、他の地方では、六月～十月の間にやるものもある。六月十一日(日曜日)を選んだのは、最近では、漁業に従事する人が、日曜日に休む人が多く、人が集まるからである。昔は、行事前に半月くらい練習したが、今は、四日間くらいだという。ペーロンの由来については、1617年に唐人屋敷において、「パイロンを祀り、パイロンを行なう」というくだりがあり、漢字は「白龍」であった。当時では、唐人屋敷に福建人が多かったが、唐人舟の海上祈願をしたり、異郷の地で故郷を偲んだりすることもあったであろうから、海神を祀って、ペーロンが行なわれるようになったといわれている。ペーロンの名称については、すでに「ペーロンその名称と由来」で述べたが、ここでは、古賀説と一致していて、それが最も一般的に知られているようである。しかし、この日には、屈原の話をお口にする人がほとんどいなくなり、海の傍の生活のなかで、人々の中には、常に海神を祭る意識があり、自らの生活環境にあった儀礼を行ない、ペーロンの目的も、自然に海上、交通安全、漁船の一年の安全祈願と変わったのである。

茂木の舟は、昔から鯨船でなく、全部実用船で、上に銅鑼を載せ、競漕船として使用していた。今は、東長崎造船所で造った競漕専用の舟を使用しているという。茂木地方では前から橋口、中組、寺下、新田と四つの集落からのチームが、それぞれの舟頭の舷側に、橋口ー弓矢模様、中組ー中一、寺下ー寺一、新田ー観音一(新田は観音様を祭っていたので)と一番をめざすという競争意識を反映した舟印を付け、赤、白、黄、青と四色の舟が競っていたという。だが、私が調査したところでは、赤、白、青の三隻しかなかった。舟には、あか取り(舟に入ってきた水を外に

汲み出す役割の人)が一人いて、中央の柱に各チームの色を代表する旗が付けてあるのが、特徴である。

黒岩氏(「ペーロン大系」(75))の昭和初期の茂木ペーロンについての調査によると、当時は太鼓を銅鑼と一緒に鳴らしたというが、現在、銅鑼だけになってしまった。また氏は、「スタートの際、四隻ともオモテの連中にはお互いに相手方の舟をつかまえている。正面を向いたとき放して競渡すべきであることを自船の利益を少しでも能くしようとするので、なかなかたやすくスタートが切れない。……こうなると、争いはつきものである。敵味方に分かれている兄弟同士の喧嘩で警察沙汰になることも珍しくはなかった。」と述べているが、現在のペーロンは、一列にならび、指揮船の指示により、標識とする旗をつけたブイで立てた線を一齐に切るわけで、相手の舟を手放さないといったこともなくなり、既に地区全体の一年一度のハレ事である。子供が銅鑼の音を聞くと、騒ぎだすといっためでたい行事で、人々に与える喜びが大きいことから、ペーロンの果たした意味がずいぶん変わってきたと実感した。

茂木のペーロンには、龍宮祭の儀礼が伴っているが、その他、彼杵半島の福田丸木、舟津、瀬戸；長崎市の戸石町、牧島町なども、龍宮祭が行なわれている。

その他、長崎では、川祭といって、ペーロンを行なうところがあるが、茂木では、龍宮祭のあと、別に行なうそうだが、福田地方では、この時、「奉納八大龍王神宮」と書いた大旗を立て、竹の柱四本を立てて、竹欄を造り、神膳供物を献じ、竹筒に濁酒を入れて柵にぶらさげる。八大龍王神宮旗を立てることにより、海上安全を祈り、または河童に恐れないようにと、川祭、水神祭、井戸祭を行なうのである。

その外、雨乞いペーロンもみられるが、それは主に大旱の際に行なわれるもので、年中行事としてのものではなかった。地理的には、長浦、形上、名串、松尾、小口などに多いが、黒岩氏の報告(「ペーロン大系」(78))では、網場の雨乞い風習について、網郷の農夫達は大旱魃に苦しめられると、雲を招き雨を呼ぶ風習があったと語っている。それによると、当地の人は、早魃の時に、竹で造った龍を布で掩って、大蛇伝説のあるルイ十四世岩にペーロン船で運び、岩へ麦藁の龍をまき付け、神酒供物を捧げ、太鼓銅鑼をならし、降雨を祈願したあと、ペーロンを行なったものだが、今はすでに行なわれていない。だが、面白いことに、この地には、雨乞いの岡郷は農人と漁祭をする漁人村があるため、雨を欲する農人と雨を欲さない漁人とが、同じ競渡舟祭を行なうため、常に衝突が起っていた。

以上の風習から、長崎の人は、最初は唐人がやっていた競渡をみて、娯楽として行なうようになったペーロンが、それぞれ自分の生活環境の違いにより、ペーロンに、龍宮祭や、海神祭、雨乞い、漁、農業祭などいろいろな意味深いことが伴われ、ペーロンの船が祭りにおける神霊の渡御船としての性格を失ってはなく、競技の面よりむしろ龍神祭が中心となっているのである。このように、スポーツ化されたペーロンにも、祭祀用としての役割がまだ大きく残されており、ペーロンの目的は、決して単なる競技物ではなく、その奥に、民俗が生きているのである。

5. 陸ペーロン

長崎では、海上に浮かぶペーロンのほか、陸で「競渡」といった少年の間で盛んになった陸ペーロンというのがある。『長崎名勝図絵』¹⁹には、徳川時代の陸ペーロンについての記事がある。曰く、

「陸龍船（おかはいろん）は四月の下旬の頃なり。是町々の児童、端午の競渡船に擬へ、凡四五寸廻りの竹を二間計りに截て舳とし、舳に立ふを設く。立てふに木茶筌あり。各好む所に随ひ之を舩ふ。児童は皆臉面に丹赫を塗り、頭首に畳紙を挿しはさみ状貌恰も神茶藨壘を欺きて竹の左右に取りつく。紅木綿の識・彩賤の簑、某の町子供中と大書きして微風に翩翾たり。また雀笠にて面を覆ひ、（雀笠は蘭にて造りたる小さき編笠なり）衆児を指揮す。船の進退鈔鑼太鼓にて打拍し、皆同音にセロウワタイ、セロウワタイと呼ばはりて町々を押し行く（セルは競なり。或いは云ふ、ワタイは渡の転語、これ皆方言。言はセラン思はばここに來れとなり。）たまたま他町の児見ることあれば、皆群り聚集まりてこれを通衢に迎ひ、喧嘈として競を約す。競決して互ひに紙旗を出し、此彼の児これ執って一所に立ち並ぶ。… …まず進んでその所に至るを勝とす。これすなはち競渡船の遅速を以て勝負を争ふに擬するなり。船勝ちを取れば彼の簑を奪ひ、また去って他に押し行く。……」

とあり、つまり、子供達が、大人たちの海上のペーロン行事を見て真似し、竹を舟とし、実際のペーロンと同じように、太鼓や銅鑼の音に合わせて、決まったところに先着出来るように、競争を行なったものである。『長崎市史』²⁰によると、

「この陸ペーロンの風習は、少年が海上のペーロンに参加する機会が少ない、またペーロンが頻々として禁ぜられたため、自然発達して來たものと謂ひたい。」と、陸ペーロンは、長崎人の發明創造だという観点を出している。

黒岩氏は、この陸ペーロンを四種類に分類している²¹。

- (1),

{	A. 男たちの陸ペーロン
	B. 女たちの陸ペーロン
- (2), 見物人の陸ペーロン
- (3), セーラエン

最初に、子供の間に流行したこの陸ペーロン、次第に男女別、更に、見物人も加わり、盛んに行なうようになるにつれ、このように、細かく分類されたものとなったのであろう。セーラエンとは、黒岩氏による²²と、即ち、「セーラエンヤー」という挑発的な動詞が「セーラエン」という名詞用語となって該風習の特称とされてしまったのである。これは、元來海上やペーロンのとき、相手の舟を挑む時に叫んだ「とうりやーえんや」とか「せーりあえんや」などがそのまま踏襲したものであるという。また、「端午の競渡船擬へ、凡四五寸廻りの竹を二間計りに載せて舳とし、舳に立ふを設く。立ふに木茶筌あり。各好む所に随ひ之を舩ふ」といった徳川時代の風習が、昭和の初期まで、稲佐方面や天草でみられ、子供が持っていたミヨシ竹は、海上ペーロンが陸へ上がってきた証明で、海上ペーロンの産物である。だが、現在、長崎の人がセーラエンしか

知らず、それが陸ペーロンから来たものとも知る者が少ないと、同氏は述べる。

私も、黒岩氏の陸ペーロンが海上ペーロンからきたという説に賛成する。子供達の持っていたミヨシ竹だけでなく、決まった所に先着するのを勝とし、また、競渡船の遅速を以て勝負を争うと同じ目的を持っているところから、陸ペーロンは決して独立したものではなく、海上ペーロンから分岐されたものであろう。

陸ペーロンの変化については、「陸ペーロンだんだん変化して船形の竹竿は廃されたが、旗は剣旗などができ、セーロウダイのかけ声も、セーラエンカという言葉に変わり、陸ペーロンという名もセーラエンとなった。その頃は、もう顔を赤く塗ることなども止めになった。……元来、海のペーロンになぞらへて出来た遊びなので、勢い、端午の節句の後先に、長崎の町全部を競走場として行なわれるようになった。明治中頃、あまりにも町と町と、大人同士の喧嘩が激しくなりがちだったので、到頭、警察の力で禁止されてしまった。」と、水田種次郎は記録している²³。私が調査した茂木地区でも、ついこの間までは子供中心のセーラエンが行なわれていたが、現在はすでに停止されている。

『市史』には、このペーロンの起源が自然発達したもので、長崎人が案出したものと述べているが、私は、これには賛成できず、先学の黒岩氏の指摘どおり、陸ペーロンも中国からの風習の一つであると思う。

中国清の地方志「瓊州府志」巻二、風俗歳時に、端午の風習と同時に「城中以竹格為船，用紙糊飾，鳴鼓鑼，沿街划戲，紹標如水船競奪，名曰旱船」とあり、本文のⅠの中国の龍舟競渡の事例の分析の所でも出てきたが、

『開平縣志』巻五輿地歳時 民国二十二年刊本 余燊謀 1933

「五月五日，菖艾地雄黃の酒を飲み以て不祥を避く，角黍を食し，龍舟競渡を行なう。

或いは草を以て龍と為し，紙を以て鳴鼓と為し歌いつつ巷を遊ぶ。之を旱龍という」とあり、瓊州府も開平縣も共に、広東省の管轄なので、ここでは、「旱船」、「旱龍」の風習がある。もうひとつの例だが、これも広東省の話である。

『瓊山縣志』巻二（清咸豐七年刊本）、端午の所に、

「城中人，縛竹為船，用五色糊飾，鳴鉦鼓，沿街作競渡狀，名旱船。」

と、同じ地域なので、その風習も似たようなものであった。竹で船とし、紙で飾り、太鼓や銅鑼を鳴らしながら町を廻るといった「旱船」の風習である。これは、広東地区だけではなくて、湖南省の地方志にも見られた。

『雲夢縣』『古今圖書集成 歳功典』巻五十一「湖廣志書」

「五月五日，賽龍舟因邑河水淺，作旱龍縛竹為之。剪五色綾緞為鱗甲，設層檣飛閣於其脊，綾以剪綵文錦，中塑忠臣屈原，孝女曹娥，及瘟司水神像……傍列水手十余裝束整麗。擇日出行，金鼓簫板，旗幟濟濟，導龍而日「送船」。……用鉄桿撐之空中，前後輪轉宛如半仙之戲，彼此角勝。次引用牲牢，酒醴，角黍，時果祭之，極其敬畏。……合炬焚之日「送船」。」

これは、更に豪華なもので、五色の綾緞をもって鱗甲とし、そのうえ「層檣飛閣」を設け鉄の

棒でその真ん中を支え、演劇のように回しながら、互いに競争するとあり、行なわれる理由としては、河の水が浅いためだという。雲夢縣は、古代楚の都「郢」に近いところであるため、その歴史が古いものと思われる。

こうしてみると、中国の「旱船」と、日本の陸ペーロンは、みな竹で船胴とするところなどけっして偶然なものではなかろう。もしも、何らかの関係もないなら、別に竹でなくても、舟と同質の木を使うこととかも知れたのかもしれない。こういったところから、長崎のペーロンは、広東等南の影響を受けただけでなく、やはり揚子江流域の要素も多く含まれていると言ってよからう。

長崎の陸ペーロンの始まった時期については、文化年間、幕府は一時競漕を停止してしまった事があるため、民衆はせめてもの心やりとしていうことで、文政年間以後に始まったのではないかとの見解²⁴もある。だが、これは陸ペーロンが長崎独自のものと理解する上での結論で、決して同意できず、具体的な時期は細かく調べていないので、分からないが、少なくとも文政年間ではなく、それより早く、長崎に入ってきたのではないかと、推測している。

この中国の「旱船」は、日本の沖縄にも伝えられ、「地バーリー」と呼ばれている。ここでは、スペースがないため、省略させていただくことにする。

以上、長崎のペーロン名称の由来、行なう時期、それに伴う龍宮祭などの儀礼及び陸ペーロンについて見てきた。ペーロンの変遷を調べることにより、舟競渡そのものを中国から伝わった形を取っているほか、ペーロンの期日や、それに伴う儀礼、行われる目的などは、みなそれぞれの生活環境の違いにより、自らの生活リズムに合わせた変化を遂げていたことがわかった。そして、長崎ペーロンの導入には、中国の福建人が介在したことは確かであるが、漕法や競技方式、陸ペーロンの研究により、福建だけの影響ではなく、揚子江流域の競渡等中国南部地方全体の影響があったと考えられる。

〔参考文献及び註〕

1. Engelbert Kämpfer (ケンペル)、元禄三年(一六九〇)から五年まで(一六九三)まで、長崎のオランダ屋敷に滞在し、その『日本史』(巻三、四)という本の中に、ペーロン記事について、長崎の住民が五月の最初の日その次の数日、水上で独特な装飾した boats や canoes で、pelo と叫び、小さな鐘を鳴らしながら、競渡レースを楽しんでいたと記している。
古賀十二郎、S42再版『長崎市史風俗編』『特殊なる行事』清文堂出版株式会社 P. 291参照。
2. 池永佳昭、1989「長崎ペーロンと南海舶」(上)『長崎談叢』第七十五輯 長崎史談会編。「長崎ペーロンと南海舶」(下)は来春『長崎談叢』に発表予定。
3. 前掲『長崎市史風俗編』
4. 「長崎名勝図絵」巻之五上『日本名所風俗図絵15・九州の巻』(角川書店) S58, PP. 209-230引用。
5. 中川忠英、『清俗紀聞』。この本は、清朝高宗乾隆頃の福建、浙江、江蘇地方の風俗慣習文物を、長崎に渡来した清国商人から問いただし、具体的な絵図をつくり和漢混淆で解説した調査記録である。
6. 前掲『長崎市史風俗編』PP. 282-284参照。
7. 前掲「ペーロン大系」(5)引用。
8. 同上「ペーロン大系」(13)。

9. 同上「ペーロン大系」(6)。
10. 前掲「長崎名勝図絵」巻之五上 P. 209引用。
11. 松浦静山, 1822『甲子夜話』(大槻如電他編, 明治四十三年(1910))。
12. 前掲「長崎ペーロンとその周辺」PP. 9-10参照。
13. 倉林正次編, S58「ペーロン」『日本まつりと年中行事事典』桜楓社 P. 398引用。
14. 「長崎市」『日本祭礼地図Ⅰ春季編』P. 305引用。
15. 前掲『長崎市風俗編』P. 277引用。
16. 黒岩義嗣氏の「ペーロン大系」(32)(33)と, 海野清氏の「船競漕の民俗―事例を中心に―」を参照した。
17. 前掲「ペーロン大系」(32)。
18. 「風俗文化編」『長崎事典』1988年(長崎文献社刊) PP. 101-102参照。
19. 前掲「長崎名勝図絵」巻之五上. PP. 208-209引用。
20. 前掲『長崎市史風俗編』PP. 299-302。
21. 前掲「ペーロン大系」(59)。
22. 同上 (61)。
23. 水田種次郎 S14年『長崎自讃』長崎市教育会 P. 68引用。
24. 前掲『長崎市史風俗編』。

Ⅲ. 中・日の比較研究

Iでは、中国南部各地における競舟行事の特徴を地域ごとにまとめ、現在の競舟行事まで、その変遷をみてきたが、IIでは、日本の長崎のペーロン、その中、とくに茂木地区ペーロンの現状についての調査報告をし、その変遷や由来などを考察してきた。この節では、中・日における龍舟競渡を、更に、競渡の行なわれる期日の分類や、競渡方式、船の構造、それに伴う儀礼の性格分析などによって、競渡儀礼の中・日間の共通点と相異点を検討してみたいと思う。

1. 競渡の祭日

古代中国人が暖かい海にとり囲まれた南方的な存在である船の競漕を取り入れ、それに、龍頭鷁首、船体の装飾、太鼓、銅鑼、その他の楽器などの東洋的潤色を加えることによって、龍舟競渡の風習は生まれた。それが、「漁米之郷」の揚子江流域から、端午節と結合し年中行事として、揚子江の下・中流域から、上流の各地域、南部中国および、日本の長崎、沖縄、東南アジア各地などへと、大きく広がっていった。だが、中国南部と長崎の事例からもわかるように、中国及び日本におけるこの競渡儀礼は、けっして端午節に定まることがなく、中国の呉越の地など、川や湖の多いところでは、一年中にみられるとあっていいほど、行なわれているのである。これは、やはり各地各地における競渡起源や、祭祀目的やその付帯条件や、環境の差異から生じたものであって、しかもそれは不可避なものである。一方、年中行事として、期日が定められた端午節の競渡が、広がっていくと同時に、各地の風土的な季節の違いにより、複雑な様相を呈している。

競渡風習の祭日の成立に対しては、小松原氏が、その「ペーロンの祭日について」(一)のなかで¹, PLAY, SPORT, FESTIVAL の三段階と分けているが、それをまとめると、以下のようになる。

(偶発的な) PLAY $\xrightarrow{\text{機会を重ね}}$ SPORT $\xrightarrow{\text{季節・日次・時刻が定められ}}$ FESTIVAL

つまり、偶発的な舟くらべと、外的条件との一致が考慮されたために、自由祭日的な色彩は薄れてゆき、その結果、私的自由祭日の域から公的な定期祭日の領分への安定化し、次第にグループや種族の団党的な対抗ゲーム祭へと発達したというのである。

端午節と結びついた龍舟競渡の期日は、比較的后世のことであろう。南洋から伝わってきたPLAY的な舟くらべは、個性的なDRAGON-BOATなる船舶形式と結合し、やがて、五月五日などの由來說と結びつき、新旧祭日の衝突、妥協、融和によって、一祭日に要約されたり、数祭日が重複したりする風習の歴史が編まれたのであった。これで、競渡祭日というものは、けっして端午節の独占ではなかった。それを端午競渡日と比較して、同氏が²、(a)それ以前に、(b)それと同時期に、(c)それ以後、と分けたが、(a)と(c)は、非端午節日の類であろう。(b)の示す領域がもっとも広いが、この非端午節の祭日も、中国・日本両水域においては、軽視できない地位を示していることに驚く。この非端午節の祭日は、更に、(A)当初から端午節の支配下になかったもの、(B)端午節の支配下から移動したものの、というふうに分けられるが³、ただし、小松原氏が「ペーロンの祭日について」(一)で指摘したように、中国の競渡水域においても、日本の競渡水域においても、(A)の判明がきわめて至難である。しかし、以上の分類によって、中国では、(B)の場合が多いことに気が付く。

(a)にしても、(b)にしても、競渡は、屈原説の起源地である荆楚の地では、五月一日から大端陽と呼ばれる五月五日までの間に、もっとも盛んであって、四月などに行なわれる場合も、五月五日のための予備的なものである。これは、おそらく(B)類、つまり、端午節の支配下から移動したものであるに違いない。

旧暦の五月五日は、中国南部にとっては、夏至前後に当たる時期で、季節の変わり目である。また、五月初めは、二十四節気においては、「芒種」といわれるように、雨期を迎えて田植えの始まる時期でもある。人々は、「悪月」の疫病や、邪気を避けるため、そして、早稲の穂出しと晩稲の田植えのため、水神を祭り、競渡を行なったわけである。だが、これも地域によってはズレがあるため、競渡祭日も端午節の五月五日に止まらずに、地域の季節変化の環境の差異などによって、多少の違いがみられる。その他は、地域によって、二月から八月にかけていろいろなものがあって考えてよかろう。たとえば、呉越の地では、イタリアのヴェニスにも負けないほどの「水郷」であるため、あえて、端午節でなくても、一年中競渡ができたわけである。

もう一方、揚子江と離れた広東、福建などの地域では、この龍舟競渡を端午節という公式的、固定的な祭日として、受け入れた場合も少なくないことを認めてよかろう。

さて、日本のほうは、以上の分類によって、端午節の前に競渡が行なわれるのがほとんどなく、五月から九月にかけての間にに行なわれるのが最も多いことが分かった。長崎のペーロンは、漁民たちが、龍宮祭などを通して、豊漁祈願、海上安全を祈願し、農民たちは、水神祭や農業祭などを通して、旱魃の時の雨乞い、豊作の祈願として行なわれた。

このように、中国・日本の競渡の祭日は、端午節をめぐる期日に行なわれるのは、都会やその近い場所に多く見られ、そしてもっとも多く分布している。この場合の龍舟競渡は、屈原の説話に由来をもとめる公式主義を主流とする、華やかな見せ物的な行事というイメージが強い。もう一方の端午節以外の祭日は、農村では豊作の祈りや、漁村では、豊漁、海上安全祈願などといった、民衆の生活のリズムや、信仰生活、生産関係の上に立ったものである。地域差によって、競渡の祭日に大きなズレがみえるが、中・日にとも、季節の変わり目に行なうという共通点がみられ、馬淵東一氏のご指摘の通り³、競渡の特有の意味は、「季節の大きな変化に伴う儀礼的雰囲気」を背景として理解されるべきでしょう」。

2. 競渡船の形態

中国では、『龍舟鷁首』と、「龍舟」なる語がでており、『穆天子伝』には、「天子乗龍船鷁舟，浮於大沼」とあり、その註には「舟以龍鳥為形，制於今吳之青雀舫」がみられ、龍舟は天子の乗る舟をさしていることが分かる。だが、この天子や貴族たちの舟遊用の龍舟は、船体が重く、スピードが遅いため、競渡船ではなく、行楽の道具であった。実際に、龍舟が競渡と結びつくようになったのは、つまり、競渡用の船を龍の形に作ったのは、唐以後のことであると黃石氏は指摘している⁴。それは、唐以前の記録には「競渡」とのみ見られ、龍頭尾の装飾を取り付けた説明がなかったからである。その後、龍舟競渡風習が、中国南部各地に広がったと同時に、貴族たちが舟遊用の龍舟を用いて、宮廷における遊覧行事としての競渡も、時代とともに、展開していった。南洋諸島から伝わってきた競渡習俗が、龍蛇文化と結びつき、中国独自の龍舟文化へと発展してきたのである。

(一)、非競渡用龍舟

貴族たちの舟遊用の龍舟が、運河や宮廷内の池などに浮かべる以外、僻遠の地へと赴くことが増えるに従い、次第に民衆の目に触れる機会が多くなり、民間でも、祭祀用や、娯楽用に使うようになった。清の李調元の『南越筆記』によると、「粵中五月採蓮競渡，至五日及止，廣州奪標較勝，有逾月者。今此風已戢。惟大州龍船，高大如海舶，具魚龍百戲，積物力，至三十年一出。」と、廣東地区などの競渡と龍舟が描かれている。つまり、粵地方では、五月に競渡を行なう風習があったが、今は既に見られない。ただ、大州の龍船は海舶（外国に行く大型貿易船）のような大型船で、積載物も大量で、これは三十年に一度出されたと云う。ここでは、競渡が終わっても龍舟は観賞用のものとして、使われていたことがわかる。貴族たちが、都を中心に行なっていた龍船の舟遊は、地方でもみられるようになった。だが、この場合の龍舟は非競渡用のものである。

唐以後、龍頭龍尾を取り付けた龍舟競渡の風習が南部各地に広がったが、『清俗記聞』には、福建地方では、龍形でない舟の競渡について記録している。これは、恐らく後世の競渡用龍船から変化したものであって、後には、龍形でない競渡船も競舟或いは龍船と呼ばれるようになったのであろう。

日本にも、中国の龍船は、競渡風習と一緒に伝わっていったが、それは、競渡用の龍舟だけでなく、非競渡用のものも伝わっている。

『日本略記』に「応和五月六日天皇御釣殿令侍臣競渡」などの史実があり、当時、社会の中心とした遊楽思潮として、外来文化を取り入れた平安朝時代に、すでに伝わったと見てよからう。また、『源氏物語』の胡蝶の巻にも、「唐めいたる船造らせ給ひける」や「龍頭鶴鳥を、唐のよそひに事々しうしつらひて」などの記録がみえ⁵、これは、日本の上代文化の創造ではなく、中国の「龍舟の戯」の模倣であったことを明記している。

そして、長崎の陸上龍頭船もそうである。これは、また海上に浮かべるものと、陸上を曳き廻すものの二種に分かれる。その前者の例は、南紀の新宮の龍船や、京都の嵯峨の車折神社の龍船、後者は、長崎諏訪神社の蛇船である⁶と、黒岩氏がいう。

長崎の諏訪神社挽物としての西浜町の蛇船については、黒岩氏の具体的な研究があり⁷、それによると、「船身約五間の長さはあろう。龍首の高さ地上約一丈ばかり、龍の角は勾欄（龍門）より数尺高い、勾欄は二層となり、……この蛇船にも支那楽が奏される。」などとある。「勾欄（龍門）は二層」とあるところから、龍船に階層を造るのは、隋陽帝の大龍船「船高四十五尺、闊五十尺、長二百尺、四層……」と、「天山草堂集」（『中華全国風俗志』上篇卷八廣東）に記した、清代の粵人の十余年に一度に行なう「舟の広さ三丈、長さ五丈、龍首より尾に至り金光目を奪い、畳綵層樓の如し」を連想させられる。そして、これは、『清俗記聞』に記した(A)型の龍舟の「おもてに牌樓（原注—これを龍門・ロンメンという）あり」とも、一致している。「支那楽が奏される」からみると、清代の粵人が、「古代英雄などに扮装した子供を龍舟の上に飾り、旋轉舞蹈する」風習（『天山草堂集』（『中華全国風俗志』上篇卷八廣東）と同じであることから、この陸上龍船も、長崎特有なものではなく、中国からの伝来であることが十分考えられる。

したがって、中・日における龍舟は、次のように分類できると考える。

龍舟	{	非競渡用（大きく、緩慢）	{	龍頭龍尾を取り付けたもの
		競渡用（小さく、軽捷）		龍頭龍尾を取り付けていないもの

(二)、競渡用龍舟

中国の競渡を明確に伝えた史料としては、南齊の劉澄之の『鄱陽記』（『太平御覽』卷六十六、地部・潭所引）がもっとも古いものとされるとは、既に前で述べたが、そのなかには「五月五日に至るごとに、郷この江水に於いて船を以て競渡す」とあり、この時の競渡船は、龍頭龍尾がなかった。唐に入ってから、『資治通鑑』（卷二四三）によると、「自唐以来、競渡務為輕駛，前建龍頭，後堅龍尾，船之兩旁，則為龍鱗，而綵繪之，謂之龍舟。」とあり、ここで、始めて争って競渡する船のことを前に龍の頭、後に龍の尾、船の両側には龍の鱗を色どりで描いていると、明確に記録され、この頃から、龍舟の名が渡と結びついて記録するようになったのであろう。

明代の陽嗣昌が書いた『武陵競渡略』は⁸、当時武陵（今の常德）における龍舟行事の詳細を記録しており、それには、

「船一に杉木を以て之を為す。其の性軽くして划しき易きを取る。燥木を得て竜骨と為さば尤も妙なり。……船式は長さ九丈五尺最も中制と為す。長きに過ぐるは十一丈五尺有り短

きは七丈五尺に至りて止む。此れ武陵郡中の船也。……船頭には二人，中央に立つ者は旗，鼓，拍板の三人……十一丈過ぐるは八十名，九丈は六十余名，七丈は四十余の漕手が坐す。

船行は旗に従い，櫂は鼓の拍子に合わす。……」

とあり，武陵では，杉の木で龍船が造られ，船式は大きいのと小さいのとがあるが，尤も適当なのは，長さ九丈五尺で，船頭に二人，中央に旗，鼓，拍板の三人，合わせて六十人余だという。また，拍板については「諸所用いず，拍板は惟だ武陵然りと為す。或いは金を以て代わり，之を失うこと愈遠し。」と見え，武陵では，漕ぐ調子に合わせて舟板が音を立てるが，他の所では，銅鑼がそのかわりである。

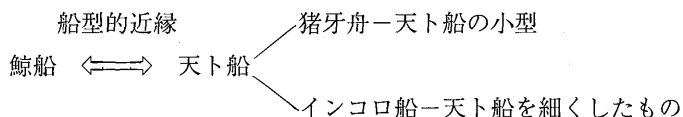
武陵の地である現在の汨羅江の競渡の様子は，丘恒興氏の調査によると⁹，

「船長さは，60.5尺，幅4.6尺，龍船は木製の龍頭龍尾をつけ，舷船に龍鱗を描き，遠くからみると，伝説の中の龍にそっくりである。太鼓，銅鑼，船尾に舵取り各一名のほか，采取り一人と三十八名の漕手で，全部で四十二名が乗船している。」

と，唐以来，龍頭龍尾のつけた龍舟競渡が伝えられ，場所によって，船のサイズなど変遷を得てきたが，明の『武陵競渡略』と現在の屈原説の中心地である汨羅江の競渡の記録を見てみても，競渡風習自体がそう変っていないのである。ただ，明以前は，武陵では，銅鑼でなく，拍板で調子を取っていたことが他の地方とは違っており，そして現在の汨羅江でも，拍板がなくなり，銅鑼が鳴らされているのである。

競渡風習といっしょに，競渡用の龍舟も日本に伝わってきたが，それは，当時の長崎のペーロンに，姿が残され，今はあまり見ない。

長崎のペーロンは，在泊中の唐人が行なったのがその始まりで，江戸時代のペーロンについて述べた『甲子夜話』には「以前は，龍頭龍尾を作り，さまざまな舟飾ありしと云う」とみるので¹⁰，長崎でもそれまでにかつて龍頭龍尾のつけた龍船を使用していたのであろうか。『長崎市史』には，当時唐人が使用していた舟は，舳板（塔載型伝馬）だと記しており，また「ペーロンの用ふる船は普通用ふるものと趣と異にして，長崎に比べて幅狭く，構造そのものが，鯨船に似て遅速を争ふ目的に能く適応している。」とあるので，その後，長崎の人は鯨船など軽快な漁船でペーロンを行なったのである。『甲子夜話』には，「舟の形は鯨船の如く，又当地の猪牙に似たり」とあるのに対し，小松原氏がその『天草のペーロン志』で¹¹，現在のペーロンの船型は鯨船及びインコロ舟を原型として，次第に競漕に適した形に移行したと述べる。鯨舟や猪牙舟，インコロ舟の関係については，柴田・高山両氏の研究¹²を，既に紹介したが，それをまとめると，次のようになる。



これで，長崎のペーロン船の形は，天ト船¹³に基づいていることが分かる。ペーロン船は，唐人が使用していた舳板（龍頭龍尾付き）から日常生活に密着した漁船として使われていた軽快な

鯨船へと変化していき、そして、ペーロン風習の普及につれ、ペーロン専用の舟が次第に考案されるようになり、現在、ペーロン用の船型は、全部決まっており、私が調査した茂木地区もそうだが、そのほとんどが長崎の造船所で造られたものだという。

このように、中国の龍舟が日本の長崎伝わり、各々の変遷を経てきた。中国では、龍舟そのままの姿が残されているのに対し、ペーロンは、既に龍舟がほとんどみられなくなり、漁民やその地方にあった軽くて、速度の早い鯨船（ペーロン）などが使用されていることが分かった。そして、ペーロンの競技化につれて、現在では、専用の船が決められているのである。

(三)、龍舟の競漕方法

『甲子夜話』には、「大船の競漕には艫の方より大綱を引き、壮健なるもの数人舳の方へ引く」とあるが、この風習はかつて茂木にもあった。銅鑼を叩く音によって舟が綱に引かれ、前へ進み、櫂はそれに合わせてかき、最初は舟がピンピンと跳んでいき、速度が促進される。綱引きの舟は、もっと舳の間のはった舟で、細い舟だと引っ繰り返して、陵駕できないからである。この綱引きは、漕手以上の役割を果たしていたと長崎市ペーロン協会の理事の小林氏はいわれる。だが、残念なことに、これは現在既に行なわれていない。黒岩氏の記録（「ペーロン大系」⁷⁴）をみると、「茂木ペーロンでは、舳の間の上に、二人の男がトモのほうを向いて坐る、トモの横木に二条の綱をつけ、その端の柄を二人が一つ宛持ち、銅鑼の拍子と櫂打の呼吸を合わせてヨイサ、ヨイサと引っ張る。船体の中に居て舟を引っ張るのが、この綱引なのである。……大ペーロンの時代では、茂木ペーロンの綱引きのように坐らないで、立って綱を肩越しに引きながらオモテの方を向いて駆け出したのである」という、またかつて「采振りが屋形を引っ張って、加勢をしたことがあり、それが負けた船の抗議となり、審判員も認めた」といった事件があったという。黒岩氏は和蘭船のバッテラでよくこの綱引きをやっていたので、それに暗示されたものであるが、それともその前の物であるかは、判断できないというが、実は、現在の中国の汨羅江龍舟競渡にも、この綱引きがみられ、柴田・高山両氏の記録（「長崎ペーロンとその周辺」）によると、「採取りは、船首尾端間に二台の二叉の木を介して張られたロープを漕手に合わせて前方に引き、船尾を上方に曲げるように努めている」とある。船の速度を促進することを目的するのは、長崎のと、非常に似た船内における綱引きで、福建地方ではみられない現象であり、揚子江の船の技術も加わっていたのかもしれない。これで、ペーロンは福建人によるものだと決めがたく、浙江省や揚子江流域の影響も、更に検討すべきであろう。

また、『甲子夜話』には「櫂とりは、総て舟端に腰をかけ、舳先に向ひて後の方に潮をはねる故、甚だ力を勞せり。」と、漕手は前向きして坐ることが分かり、実際現在、長崎ペーロン大会に参加する舟も、前漕ぎ法なのである。これは糸満のハーリーにも見られる漕法である。この前漕ぎ法は、中国の雲南省晋寧石寨山出土の銅鼓の船紋にでてくる、船上に腰をおろした漕手の前屈姿勢に似ており、この影響も考えられると、すでに柴田・高山両氏が指摘したことである¹⁴。

だが、瀬戸地方の圏内の舟漕ぎは、特別な漕法を示しているのである。黒岩氏の「ペーロン大系」⁵⁷の記録によると、この地方では、腰掛けを用いないので、漕手は全部中腰となり、両膝を

舷について、いわゆる前がきをする。櫂が短いため漕手の頭が海面とすれすれになることがあり、膝頭が擦り剥けてしまうので、膝すりを用いるという。この漕法は、短距離漕法としては、非常に効果のあるものであるようだが、実は、長崎の茂木地方でも、戦後暫らくはこの漕法を使用していたことが今回の調査で分かった。前漕ぎ法は、最近のものであるという。だが、『甲子夜話』によれば、江戸時代は前漕ぎ法だが、この中腰前漕ぎ法が、最初にあったものか、それとも途中から中国から伝わってきたのかは、今後の研究とするが、ここで、貴州省の清水江の漕法について、紹介したい。

氏の調査報告によると¹⁵、「清水江の龍舟の構造は、子母船（親子船）とよび、親舟の両側に子舟をつけた形をとり、大小いづれも丸木を抜いたものである。先端は水牛の角を帯びた龍頭をつけ、船尾には鳳凰の尾とよぶカヤがさされる。漕手は六尺ほどのオールでたったまま漕ぐ。また、漕ぐ人は尻が船の中に沈まない程度に狭いため、船底には水はすこしもたまらないという。」。そして、この構造は、湖南省の常德などの地にも見られると氏は述べている。文中の写真をみても、笠をかぶっている漕手たちの頭は一斉に水中に向いており、大きな笠は、水面にぶつかるほどであった。考えれば、中国南部各地で、家鶏や、ガチョウなどを水中に投げ、それを奪い取る、即ち「奪標」といった競技方法があるが、この中腰前漕ぎ法は、目標を掴むには、適当な姿勢なのである。おそらく、これも中国の立ったままの漕法などと密接な関係にある。ペーロンは、唐人が娯楽のため行なったのが最初であったので、中国の「奪標」の要素が見えず、この中腰前漕ぎ法も、次第に使用されなくなったのであろう。

したがって、ペーロンは地理的には、確かに福建と近く、そちらの影響が大きいものと思われるが、競漕方法の一つ見ても、汨羅や揚子江流域の影響も、更に検討すべきだと考える。そして、競漕方法も、競技方式によって変化していったことを漕法そのものを検討するときに考慮されるべきだと思った。

3. 競渡に伴う儀礼

ここでは、中・日の競漕儀礼の性格分析を通じて、中国と日本の競渡における共通点と、相違点を更に解明していきたい。

端午節に行なわれる競漕儀礼における漕法は、漕手が向いて櫂で漕ぐカヌー式の漕法であると述べたが、中国の場合は、競渡に伴って、その前にならずと言っていいほど儀礼が行なわれるのである。だが、中国の龍舟競渡を模倣して始まったペーロンは競渡の行なわれる期日や、船の構造や競技方法などに、その同一性が見られたにしても、競渡儀礼における模倣はまったく見えず、日本の場合は、独自性の富んだものになっているのである。

では、実際に競渡に伴う儀礼、そして儀礼的に尤も意味の深い部分と思われる競渡の由来ないし、目的について、比較して考察してみたい。

では、まず中国のほうを見てみたい。競渡をもっとも詳細に記した古い文献である『荆楚歲時記』には、端午節の時に競渡が行なわれ、「俗に屈原が汨羅に投ずるの日、其の死所を傷むが為なり。」と記した後、また水死者の伍子胥や曹娥などと結びつく説を出している。明代の競渡風

習を記録した『武陵競渡略』にも、「競渡は招屈を本とす」尤も知られている屈原説に同意をはらった後、「俗に伝う競渡は攘災なり」ともう一つの提起をしていた。それを立証するため、著者陽嗣昌氏は、競渡が終ろうとするときに「牲酒黄紙を具し、直に下流に趨き、焚く、詛呪、疵癘、夭札（病や若死に）盡く流れに随ひて去る。これを送標と謂う。」という「送標」の行事が行なわれることを述べる。その他に、龍舟の水を汲んで浴湯としたり、紙船を焼き水神に火災予防や疾病治癒を祈ったりするなどの行事も行なわれ、龍舟競渡に攘災の意が大いにあることを語っている。

「送標」の風習は、呉越の地でも多く見られ、『清俗記聞』にも、福建では、見物の人たちが家鴨を水中に浮かべ、酒壺に、賞銀の額や姓名を記した書き付きを入れて封じて水上に流すと、龍船の者が先を争って取り、得たものを勝ちとする記録が見える。また、黄石氏は、清代の岳州の岳陽人が、端午の日に攘災のため競渡を行ない、その日に疾病者が水際で神を祭る祠をたてて、草船を浮かべる「送瘍」という風習があり、龍船は「送瘟」の賜物であると指摘している¹⁶。

この「送瘟」の風習は、端午節に行なわれる他の行事、たとえば、門戸の上に朱索と五色印をかけたりするのと同じく、端午の日から陰気が強くなり、人間の健康及び命を犯す悪疫発生の時期であるため、この夏の疫病を払い除かなければならないという中国古来の考え方から来ていることは、既に前で述べた。が、もう一つの理由としては、『漢書』卷二十八、地理志、楚地の条では、「敬鬼神、重淫祀」とあるように、戦国時代、揚子江流域の荆、楚、呉、及び粵（現在の広東省）の人々に「信鬼而好巫」という風習があったからである。

具体的には、競渡風習に龍を迎える儀礼が各地で見られ、清代半ばごろの広州近辺の競渡風習を記録した屈大均氏の『廣東新語』によると、競渡を観賞する人たちが、龍舟が過ぎてから、争って水のなかに飛び込み、竜水を浴びる、いわゆる「洗龍船水」の風習があるという。このように風習が、現在まで伝えられ、近年の汨羅江の競渡にも、競渡を始める前に、まず、龍頭祭が行なわれ、龍頭を抱いて水中に飛び下り、龍頭が水、また水夫もその水を浴びることによって、競渡の安全が守られ、水夫達もそのおかげで攘災ができると信じられているのである。これは、龍神の神聖なる力の保護を祈願することに意味があるのである。

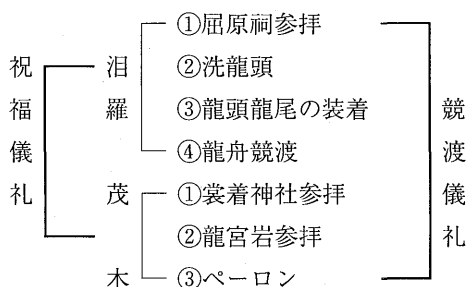
中国では、船に龍頭龍尾をかたどり、龍舟の競渡を行うことは、屈原を救うためなどの説が、後世の文人たちによって、広く知られた表面的な理由であって、そのほんとうの目的は、龍神の保護を受け、攘災安全、雨乞い、豊作祈りなどの効果を期待するところにあると思う。龍舟競渡は、端午節の屈原を弔うためのものとして、日本の長崎などに伝わってきたが、それに伴う儀礼も競渡の行なわれる期日と同様に、中国の物を習わなかったかもしれない。

長崎のペーロンは、競技化することによって、祭祀的な要素はいたって稀薄となってきており、儀式を行なうことがほとんどなくなっている。だが、前に述べたように、スポーツ的な傾向を見せたのは、近年来のことであって、これは、中国でもみられる現象である。それまでのペーロンは、祭祀という色合も濃く、競漕に伴って、龍宮祭や農業祭などが行なわれたのである。茂木地区の事例などからも分かるように、娯楽として伝わってきた中国の龍舟競渡が、当地の信仰生活

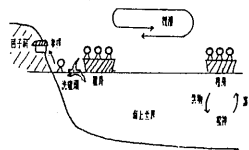
と結びつき、海上、交通安全といった安全祈願の目的が期待されるようになったのである。

では、現在茂木地区のペーロン樽納め神事ともっとも龍舟競渡の古い地である湖南省の汨羅江の龍頭節に伴う競渡の儀礼を比較してみたいと思う。それぞれ、実例に基づき、競渡に伴う儀礼の意味を考え、その共通点と相違点を見てみたい。では、まず、両地域における競渡儀礼の手順を簡単に次の（図5、6）に表わしてみた。

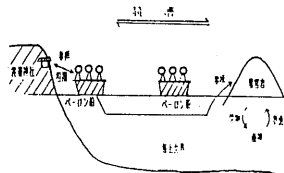
（図5） 競舟儀礼のプロセス



（図6-1）汨羅江の競舟儀礼の構造



（図6-2）茂木ペーロンの構造



この両者とも、祝福儀礼が行なわれた後に、競渡が行なわれ、神の祝福を願ひ、神の加護を獲得するところに共通点を持つ。だが、儀礼の内容は、それぞれ異となっている。

汨羅江の場合は、屈原祠に漕手達が龍頭を抱いて、供養具をもって参拝し、そして、龍頭を抱いて水中に飛び下り、龍頭が水、また水夫もその水を浴びてから、聖化された龍頭龍尾を船につける。船も人も祝福儀礼を通じて、俗が聖化され、神的存在になる。茂木のペーロン樽納め神事は、漕手たちの朝の神社参りから始められ、神主や聖なる存在である子供達がヒョコサン舟に乗り、龍宮岩に行き、神饌をお供えしてから、海上を清払いし、神酒と鯛を大海に注ぎ、海上安全と漁船の操業の一年の安全を祈念するのである。

祝福儀礼が終わってから、競渡儀礼が行なわれる。汨羅江の場合は、粽や（昔は水死者）、肉饅頭などを水中に投じ、神の加護や、鬼魂からの危害の防止や、禳災、禳疫を祈り、競漕を行なう。競漕は、神に見せるための演劇であり、神への奉納技術である。茂木ペーロンは、競漕前に、神への酒や魚などの供養が既に終わっているので、ここでは、ただの演劇である。汨羅江の龍頭節と茂木のペーロン樽納め神事は、神歓待という性格をともに持っている。

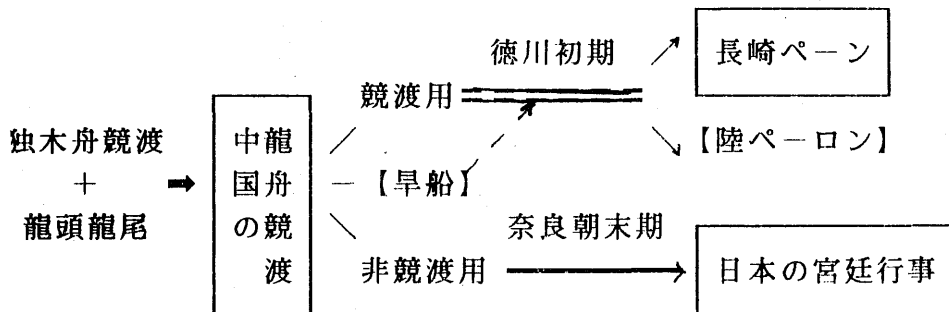
以上、比較することによって、中国の競渡は、龍舟の聖化や、禳災の要素が最も大きいのに対し、長崎のペーロンは、豊漁、豊作祈願の要素が目立つ。龍舟祭は、多目的で、祭祀複合の構造を持っているのである。

また、日・中の共通点ではあるが、競渡はたちまち喧嘩や争いを招き、度々禁じられていたが、

競渡風習は姿を消すことがなく、今は、村と村の団結や、友好関係を強めることを目的とする行事となっている。

4. まとめ

中国と日本で行なわれる舟競渡の問題を、祭日や競渡船の形態、競漕方法、儀礼などの観点から、中国から伝わったペーロンは、いったいどんな変遷を経てきたのか、この風習をどのように独自の生活文化と結びついて発展してきたのか、それぞれの共通点と相違点を見てきたが、ここでは、下のように、まとめてみることにする。



競渡の原始的な形である南洋の独木舟が中国に伝わり、中国の龍の思想と、中国式の太鼓・銅鑼及び船体の装飾などと結びついた端午に行なわれる龍舟競渡風習が、中国南部及び北部へと伝わっていく。龍頭龍尾をつけた龍船は機能的には、競渡用と非競渡の二種に分かれ、非競渡用の龍船は、早くも奈良朝末期（710-784）に、日本に伝わり、当時の貴族たちの遊戯的なものとなった。競渡用の龍船及び競渡風習は、徳川初期に長崎に伝わった。「旱船」が日本に伝わった具体的な時期は、詳しく調べていないので分からないが、陸ペーロンは、ペーロンとはほぼ同時代に入ってきたかもしれない。

中・日における競渡風習は、歴史的、地理的な変遷を経て、いろいろと変化してきたが、その共通点は、大別次の三点にまとめられると思う。

その一は、中・日における競渡風習は、競漕（ボートレース）だけでなく、それと一貫した貴族たちを中心とする非競渡用の龍船の遊覧行事、または、「旱船」という竹などで船胴を造り、太鼓や銅鑼を叩きながら、水中における舟競渡を真似して、陸上で町を走り廻る風習がともにみられる。これは、子供を中心とするもので、競渡船の速さを以て勝負を争うと同じ目的をもつ。長崎では、「陸ペーロン」といい、沖縄では、「地バーリー」という。そして、現在では、どちらにしても、祭祀的な要素が少なくなり、競技化やショー的な現象が見られる。

その二は、端午節を中心に行なわれるのが、大半数を占め、中・日ともに、地域により、自分の生活リズムに合わせた期日の変化が見られるにしても、季節の「折り目」、「節」に行なわれる

のは変わらない。例えば、中国貴州省の清水江畔に生活している苗族の人たちは、旧五月二十日を端午節とし、現在でも、その前後の五月二十四日を中心に「龍船節」を行なうのである。旧曆五月五日は、夏至前後という時期に当たるもので、陰・陽の分かれる時期でもある。この日を過ぎると陰の力の抵抗が日ごとに強まる一方、陽の力は日ごとに衰えていくといった季節の変わり目である。また、この時は、「芒種」といわれ、雨期を迎えて田植えの始まる時期でもある。長崎では、足洗やバゲ祭などの農業祭としてのペーロンも、六月から七月にかけての田植えの時期にあたるものである。中・日の競渡は、季節の変わり目に行なわれる点で一致しているのである。

その三は、舟競渡の儀礼は、龍神信仰と深く結びつくことに、共通点を持つ。中国では、早くも『左傳』には「龍見至雨」とあり、龍が雨と豊饒をもたらしてくれるものだと信じられ、東南部のいわゆる江南の水稻耕作地帯では、雨期に入る端午の頃に、稲作に重要な豊かな水雨を龍王に祈願することが行なわれ、水中に粽などの供えものを献じること、龍神への犠牲である。エバーハルト氏によれば、中国東南部では、古代越の頃から、水中神靈に対して供物を捧げることが行なわれ、この神靈は本来は水中で溺死した人々の怨霊であったものが龍に象徴され、各地の説によると、この神靈＝龍に対して毎年一人ずつ、人身御供が行なわれていたことを暗示していると指摘する¹⁷。エバーハルト氏の論点に従えば、本来水中の神靈＝龍にたいして捧げていた米や粽などが、次第に屈原や伍子胥、或いは女の霊を慰めるために捧げるように意味が変わってきたのである。

長崎のペーロンは、これまでみてきたように、漁業と密接に結びついた龍神の信仰が今日でも顕著に見られるのが大きな特徴である。これは、茂木地区や天草、西彼杵、五島などに見られるペーロンに伴う龍宮祭である。調査に当たった茂木地区では、今日でも、龍宮にいる龍王様に豊漁と生産生活の安全を祈願する儀礼がペーロンに伴う。競技化しつつ現在でも、ペーロン船は祭りにおける神靈の渡御船としての性格を失っていない。

龍は海や河の支配者であり、海や河の傍に住む人々の安全を守る神でもある。こういった龍の信仰に依存する稲耕作や漁撈に携わる人々の水に対する高い感心から生まれてきたものであろう。河の傍に住む人にとっても、漁村に住む人にとっても、龍神信仰は、幸をもたらし、安全を守るといった点では、一致しているのである。長崎だけでなく、沖縄や日本の他の地でも¹⁸、龍神を海から迎え、そして送り返すという龍神の去来信仰が認められ、ラオスやタイなどでも、田植えの時期に龍を迎える儀礼に伴う競渡が行なわれる。豊作儀礼にしても、豊漁儀礼にしても、生産行為の所作をまねることによって予祝を意味する農耕儀礼の普遍的な性格を示しているものである。これは、恐らく水稻栽培の技術や、漁撈造船航海の技術とともに、日本から東南アジアまでの広範囲の地域に広まったのであろう。

では、その相違点も以下の三点に指摘できると思う。

その一は、船の形態の違いである。中国における龍舟競渡は、今でもほとんどが龍頭龍尾で船を飾るのに対し、ペーロンは、伝来当初、龍頭龍尾をつけてある記録がみえたが、その後、だん

だと自らの日常生活に密着した漁船を用いるようになった。龍船に変わって、ペーロンは鯨船や漁船が使われていることが分かった。

その二は、競渡に伴う儀礼の内容の違いである。中国の競渡に伴う儀礼は、二つの大きな特徴がある。一つは、五月は悪月だと信じられ、この時期に鬼神の弊害が目立ってくるため、それを祓うために競渡が行なわれた。もう一つは、五月の始めは「芒種」といわれ、南部稲作地帯では、ちょうど雨を必要とする時期なので、人々は競渡を行なうことによって、水神を祭り、雨乞いをし、豊作を祈る。これは、龍神の霊的存在と禍神としての善悪の二重的な性格と深く関わりを持つ。人々は、競渡を行ない、龍神を祭ることによって、以上の二つの効果を期待する。祈願の方法としては、大概二つに分かれ、一つは若い女性を犠牲（イケニエ）にして、舟に載せて川に投じること、これは、文化が進むにつれ、若い女性を殺して龍神に捧げるような行事がなくなり、屈原や、伍子胥、曹娥など水死者の話へと転換していく。もう一つは、二つ或いは三つの龍をかたどった船を競漕し、龍船は龍の戦いを意味し、龍神を闘わせる呪術的方法によって、降雨を祈願する。こういった祈願方法により、龍神を歓待しようとするのである。

日本は、中国と同じく、アジア文化の共通な基盤に立ち、その根本に共通した龍神信仰が見られるが、儀礼の具体的な内容が違う。中国の競渡は、屈原説がもっとも広く伝えられているが、日本の競渡は屈原を弔う気配が全然なく、自らの生活文化と結びつき、すっかり日本のものとして定着している。

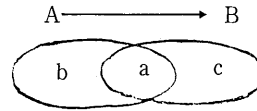
長崎のペーロンは、当地の龍宮祭や農業祭と結びついて、競渡に豊漁祈願や豊作祈願などといった自己文化にあった新しい意義を与えている。つまり、ペーロンは、もう本来の龍舟競渡の意味と離れた、新しい意義を持つ舟競渡の行事となったのである。

その三は、独木舟に龍頭龍尾を飾り、太鼓や銅鑼をつけるなどといった中国文化で色染めた龍船競渡風習は、中国で誕生したものであるが、それに対して、日本の場合は外来文化である。早くも奈良朝末期（710-784）に、当時の貴族たちの遊戯的なものとして、龍船風習が日本に伝わっており、競渡用の龍船及び競渡風習も、徳川初期に長崎に伝わったのは、明白であり、すでに述べてきたことである。外来文化を吸収して、自らの文化を築きあげることは、日本文化の一つの大きな特徴であるが、龍舟競渡の風習も中国文化の受容の一例である。だが、その伝来文化の受容に際しては、首尾一貫の真似ではなく、自分たちの意識の枠に照らして、ある程度の選択が行なわれた。その例としては、船の構造や、形態、競渡の行なわれる期日や、それに伴う儀礼など、時代の経過とともに、一定の地域内においては、地理的、経済的、その他の条件のもとで、その条件に適応した形で行なわれ、龍舟競渡の本来の姿が変えられ、すっかり日本化してしまったのである。

以上、競渡の行なわれる期日、競渡船の形態、競渡儀礼、その背景にある信仰の四分野に分けて検討したのであるが、中、日それぞれ多くの問題点と豊かな内容をもって展開していることが分かった。

その結果、龍船競渡風習の日本伝播は、次の図のように表わせると思う。

中国の龍船競渡をAと、日本の舟競渡（長崎ペーロン）Bとの二つに分けるとすれば、もともと $a+b$ で成り立ったAが日本の伝播に従って、 $a+c$ のBとなる。



aは、中国と日本の共通したところであるが、それは、前で述べたように、海上の競争と陸上の変わり目に行なわれることや、この競渡儀礼の背後にある共通の民間信仰などがあげられる。bは、日本への伝播の際に、選択、取捨てられた部分で、つまり、現在の中国における競渡行事の特徴を示している要素である。cは、Aが伝播していった際に、日本独自の生活文化を習合したものといえよう。それが、中国からそのまま受容したaと一緒に、新しいB—日本のペーロンを誕生させたわけである。そして、現在AもBも、それぞれ内部で適当な進展（小進化）をし、違った儀礼化が進み、いっそう鮮明な中・日対比の姿をとるようになった。例えば、船の形態や、競渡に伴う儀礼の違いなどが、その例である。これは、日本が異文化への受容から、拒絶、そして創造への一過程の示しでもある。

中国の龍船競渡は、単なる娯楽、「水戯」として、日本の長崎に入ってきたのだが、次第に変化が見え、日本のリズムにあったものへと姿が変えられた。同時に、中国と日本は、同じ農業国であるため、農耕生活にもとづく季節の変わり目に競渡が行なわれた。農耕儀礼の一種である、雨と龍神という素朴な民間信仰が競渡儀礼の背景にあり、龍神を迎えて、歓待し、そして送りだす儀式を行なうことにより、龍神に、農民は、農作物に不可欠の降雨を祈願し、疫病や災難を払ってもらふのに対し、漁民は、海の幸をもたらし海上での安全を守ってくれることを祈願することは、人々にとっては、生活上の不可欠のものであったと考えられる。

今後、この競渡行事も固有の民間信仰と結びつきながら、いわば生きつづけるか、都市化しつつあるところでは、信仰が薄れ、単なる競技・娯楽として生きる道を見出すか、もしくは滅びる運命にあるかの、どちらかとなろう。郷土に伝わる競渡風習を一つみてみても、その意味の追求などから、意外に遠い祖先の生活と心にまで触れることができるのである。そして、中国と日本は、同じアジアの文化圏にあり、共通点をもつと同時に、それぞれ、地域的な差異のあることは具体的な比較や分析によって、指摘することができたと思われる。

〔参考文献及び註〕

1. 小松原濤、「ペーロンの祭日について」（一）『長崎論叢』40 p. 59参照。
2. 同上。
3. 馬淵東一、「爬竜船について」『馬淵東一全集』三巻 p. 423引用。
4. 黄石、『端午礼俗史』p. 108参照。
5. 黒岩義嗣、「ペーロン大系」（6）。
6. 同上「ペーロン大系」（7）。
7. 同上。
8. 陽嗣昌「武陵競渡略」『古今圖書集成』歳功典五十一卷（歳加一，七冊）
「武陵競渡略」は、『続説郭』にも入っており、明代に武陵において行なわれた龍舟祭行事の詳細な記録で

ある。

9. 丘恒興, 1987『中国民俗采英録』湖南文芸出版社 pp. 236~246参照。
10. 『甲子夜話 I』巻七(東洋文庫) p. 118引用。
11. 小松原濤, S 31『天草ペーロン志』天草民報社。
12. 柴田恵司, 高山久明, 「長崎ペーロンとその周辺」『海事史研究』第三十八号 pp. 9~10。
13. 天ト船は, 天道, 伝道などとも書き, 江戸時代の標準的和船の船型だという。
桜田勝徳, 「改訂船名集」(3)『海事史研究』三, 四合併号 pp. 128~129. による。
14. 前掲「長崎ペーロンとその周辺」p. 35。
云南省晋寧石寨山出土の銅鼓の船については, 君島久子氏がその「竜神(竜女)説話と竜船祭(1)」(『民博研報』二巻一号)に, 報告がある。
15. 萩原秀三郎 1987『稲を伝えた民族—苗族と江南の民族文化』pp. 258~259参照。
16. 黄石『端午礼俗史』p. 133参照。
17. Eberhard Wolfram 1942 "Chinese Festivals" (『中国人的祭り』)
敦煌書局有限公司出版 p. 69~96参照。

お わ り に

日本の長崎のペーロンが, 中国系の渡来文化であることは, 指摘のあったことだが, その伝来ルートや, 船の形態, 競渡に伴う儀礼など, 競舟の様々な様相をいくつかの観点から追求し, 比較することにより, 中国の龍舟競渡に見られない独自の発展を遂げてきたことがわかる。中国から伝来したこの競舟風習は, 日本独自の信仰や, 儀礼と結びつき, 競渡の目的も豊漁, 豊作, 安全祈願といった民衆の日常生活に密着したものへと変化していったのである。

年中行事としての競渡行事は, 船そのものを祀るのではなく, 船という形式と, 船をめぐる風習をかりて, いろいろな神や人物の霊などを祀るところに, 本当の意味が含まれている。即ち, 屈原, 伍子胥, 曹娥などの霊を弔い, 悪疫を祓い, 川や海の不浄凶邪を清め, 農民は豊作を祈り, 舟人は龍神や海神, 水鬼などに海上平穩, 水上安全を祈願するなど, 競渡に期待される効果が, それぞれ違うのである。

こうして, 環境が強く生活様式の上に働きかけ, 農民や漁民, 舟人など, それぞれの生活状態の差異に基いて, 祭祀目的に多種多様なものが生じてくる。またその地方の風土的關係や伝統的慣習などによって, さまざまな郷土的な色彩が決定されていく。新たに芽生えてくるのも, これらの諸条件に伴って始められるのである。

こういった龍舟競渡の行事を一つ見てみても, 民俗風習というものは, 常に場所や, 時間, 生活文化や時代の流れなどにしたがって, 変化していくものであることがわかる。逆に, 変化のない民俗風習はないともいえるであろう。民俗風習の存在意義と価値も, 時代の要求に応じて変化するところにあるのではなかろうか。

龍舟競渡の行事は, 大変膨大なテーマであるため, 本論では, ただ中国南部各地に行なわれている競舟と長崎のペーロンをいくつかの観点から具体的に, 比較分析を行なってみたただけだが, 日本では, 長崎以外の地方でも, 舟祭りが多く行なわれているのである。たとえば, 沖縄のハー

リーも中国からの伝来であることとは、はっきりしており、神話の伝承にかかわる美保神社の諸手船神事も、「ハリハリセー、ハリハリセー」と唱えながら船を漕ぎ、これは、熊野の諸手船と同じように、ペーロンと似たカヌー式漕法で、神幸の祭りであるといわれるが¹、今後、日本の他の地で行なわれる舟祭りが、中国の龍舟競渡と何らかの関係があるかどうかを更に研究する必要がある。また、この行事は、東アジアから東南アジアにわたって広く分布するため、稲作耕作との関わりや、文化的な位置付けが大事であると同時に、近隣地域の具体的な比較研究も、その全貌を把握することと競舟を年中行事として取り入れている民族およびその民族の文化的背景についての検討には、不可欠なものであると考える。

最後に、本稿の作成に当たって、資料収集からご助言までお世話になった熊倉功夫先生、佐野賢治先生、並びに、長崎の現地調査にあたって、ご協力をいただいた長崎歴史文化協会の越中哲也・池永佳昭両先生、長崎ペーロン協会理事の小林島男氏、西田鉄善氏、ほかお世話になった多くの方々に、深く感謝の意を申し上げたい。

[参考文献及び註]

1. 桜井満、「船祭りの系譜」『國学院雑誌』83巻11号 pp.277～278. 参照。

新刊紹介

丘 恒興著

『中国の民俗をたずねて』

面積が日本の約26倍、56の民族からなる中国の民俗をトピックを中心に要領よく概説した民俗紀行文である。『人民中国』誌上で連載したものを一冊にまとめたものなので、すでに目にふれ、読んだ人も多いであろう。

著者は『人民中国』の記者、中国民俗学会々員で大変ユーモアに富む人物であると、第一回中国民俗学会の席上でお会いした時の印象が今だに残っている。本の上でも民俗を見る緩い視点が反映し、机上旅行を楽しみながら、中国民俗が理解できる内容構成となっている。

河南篇（中華民族発祥の地のひとつ、黄河滔々）、甘肅篇（シルクロードに生きる、ラクダとともに、敦煌に住む）、山東篇（齊魯の遺風、漁村の詩情）、陝北篇（窯洞の暮らし、冬

の農家、新婚の夜の狂騒、陝北の民間芸）、四川篇（四川の食べもの、竹と紙の産地を訪ねる、天府の国の風俗）、貴州・雲南篇（名酒 茅台の里、馬帮の伝統、漢族とイ族の風俗混合）、吉林篇（東北農村の春節、冬の暮らし、長白山の山の民）、福建篇（華僑の故里、花のなかで暮らす、香りと味わい、海辺のしきたり）、浙江・江蘇篇（魯迅の故郷、蚕を語る、水郷蘇州、太湖有情）、湖南・湖北篇（汨羅江畔の端午節、水郷の暮らし、屈原の故里）広東篇（食在广州、客家人）の章だてで、中国の人々の暮らしぶりが等身大で紹介されていく。

（佐野賢治）

A 5 判336頁索引4頁 発売元東方書店

1989年2月刊、2900円